
DIAMOND SPIRITS

今野 ミーヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D I A M O N D S P I R I T S

【Nコード】

N 3 4 0 3 N

【作者名】

今野 ミーヤ

【あらすじ】

ギヤマニア王国のトレジャーハンター（墓泥棒ともいう）・エメルダとアンバーは、秘宝の魔力で三百年前の時代に飛ばされてしまう。そこは、魔法による”環境破壊”が進み、大地から魔力が枯渇しつつある世界。元の時代に帰るため、商売敵だった二人は一時休戦して相棒を組み、ご先祖様を助けて秘宝集めの旅をすることに……！？ もろRPG調異世界冒険ファンタジー。

序章 月夜のシャンデリア城

満月の光に照らされた城壁を、オレは鉤付きロープを伝ってするすると登ってゆく。

姿を隠す必要はないんだ、この城はもう百年以上も前から無人の廃墟なんだから。

え？ だったらわざわざ、夜に忍び込まなくてもいいだろ、って？
それが、夜じゃないと見えないものってのが、あるんだな。

城壁の上に立ったオレは、首に掛けていたペンダントを月明かりにかざした。

母ちゃんの形見なんだ、これ。

手の平にすっぽり収まるくらいの黄金の円板の真ん中には、大粒のダイアモンド。その周りを囲んだ、太陽みたいな花みたいな幾何学模様の間に、色とりどりの二十四個もの小さな宝石をちりばめた、すっげー値の張りそうな代物だ。

でも、驚くなかれ！ こいつはこれ自体の何千倍、何万倍って価値のあるお宝の在処を示す、コンパスなのさ。

こうして月の光を浴びると、ほら。幾つかの宝石がぼうつと内側から淡く光る。この光が、お宝までの距離と方角を表す暗号になっているんだ。

大盗賊だった親父でさえ、このペンダントの秘密に気付かなかったのは、しょうがない。この光は、満月の夜に、それもオレが持った時にしか見えないんだ。

古の魔法の名残、ってやつらしい。

今から三百年前の”魔竜戦争”を境に、世界から魔法の力は失われた。けどその後も、魔法の効果を留めたお宝とか、弱いながらも魔法の素質を持った人間とかが、ごくたまーに見つかってる。

で、何を隠そう、オレ様も実は大魔法使いの血を引いてるんだ。
オレの母方のご先祖様は、かの魔竜戦争の英雄、コランダム大公バ

ルトーとシトリン妃。魔竜の軍勢を率いる侵略王ジェイドを倒した、立役者なのさ。すげーだろ、えっへん！

……っていつても、落ちぶれたもんだよ。

独立を果たした統一コランダム大公国は、三百年の間に四つの小国に分裂しちゃった。オレの両親は、戦火の絶えないコランダム島から、かつての敵国だったギヤマニア王国に移住してきた、貧乏な羊飼いの農家だったんだ。

あーあ、母ちゃんが生きてる間に、お宝の謎が解けてたらな。母ちゃんだって苦労した末に病気で死ななくて済んだし、親父も盗賊になんかなってなかったろうに。

……おっと、いけね。湿っぽくなっちゃった。夜が明けちまわないうちに、お宝、お宝っと。

ペンダントの光の暗号を読みながら、オレは崩れかけた城壁の上を移動する。近いな。もうすぐだ。

とー、主塔を目指して歩いていたオレは、朽ちた窓の陰から中庭に出て来る人影に気付いた。大急ぎで、崩れ落ちた階段の穴に身を潜めて様子を窺う。

誰だ？ここ、シャンデリア城は昔の王城だけど、今はもぬけの殻だ。遷都した時に財宝やら家具調度やら、目ぼしいものは一切大切に持ってたんだ。今更番人なんて置かないだろ。

すると、まさか……？

長剣を背負った、背の高い黒髪の男。彫りの深い整った顔立ちが、青白い月明かりを受けて暗闇に浮かび上がる。あれは、矢張り……！

「アンバー！」

オレは中庭に飛び下りて、駆け寄った。

「よう、また会ったな。チビスケ」

聞き飽きた、小馬鹿にしたような笑いを含んだ低い声。

「チビって言うな！オレはエメルダ。大盗賊ジュラルミンの一人息子、エメルダ様だよっ！いーかげん、覚えろよな！」

「物覚えは悪くない。チビだからチビと言っているんだ。チビスケ」
大きな節くれだった手が、ガキンチョ相手にするみたいに、ヨシヨシとオレの金髪頭を撫でた。

悔しいけど、オレの背丈はやっと四尺八寸（約一四五？）ってところ。この男は六尺をゆうに一、二寸は越えている（約一八五？）。
「オレはまだ十三なんだよ！お前ぐらいの年になれば、オレだって……きつと……」

「無理だろう。俺は五年前でも、今のお前さんより四寸（約一二？）は大きかったぞ」

ん？ってことは、こいつ十八か。今初めて知ったよ。思ってたより若いな。

……あー。改めて紹介せねばなるまい。

こいつは、オレの商売敵のアンバール。顔良し、剣の腕良し、根性悪しと三拍子揃った、いけ好かないにーちゃんだ。

城の中から出て来たからには、今日もまた……？

「これで十一勝一敗一引き分け、だったか？残念だったな」

アンバールは懐に持っていた宝石を、ぽんと宙に放り投げて見せた。鶏の卵くらいの大きさもある、とんでもなく大粒のダイヤモンドだ。月の光を反射して、虹色に煌めく。

「あーっ！また横取りかよ！？お前、何だっけいつも、オレの行く先々に先回りしてやがるんだよ！」

「知るか。俺こそ聞きたい。何だっけお前さんは毎度毎度、金魚のフンみたいに俺の後にくっつき回ってるんだ？」

「くっつき回ってないっ。お前のキザったらしいツラなんか、二度と見たくもないってのに！」

オレは、ぴょんと飛び上がってアンバールの手からお宝をもぎ取ろうとした。

「返せよ」

アンバールはひょいと手を頭より高く上げる。くそー、全っ然届かない。

「いつからお前さんのものになった。俺が先に見つけたんだぞ」

「今回ばかりは特別なんだよ。そいつは三百年も昔っから、オレのもんって決まってるの！」

「何？」

オレは襟元から金のペンダントを取り出して、アンバールの鼻先に突きつけた。

「オレのご先祖の遺産なんだから！」

サッと、アンバールの顔から余裕の薄笑いが消えた。血相変えて、アンバールはオレのペンダントをひつつかむ。

「おい、チビスケ！こいつをどこで手に入れた？」

ペンダントの鎖が、ぐいっと首に食い込んだ。オレはペンダントを引っ張り返す。

「どこでも何も、母ちゃんからもらったんだよっ。先祖代々、オレん家に伝わってきたんだ。その昔の、バルトー大公とシトリン妃の代からさ！」

ペンダントに気を取られて、アンバールの反対側の手が下がってる。チャーンズ！

オレは空いている方の手を、アンバールが持っているお宝に伸ばした。指先がひんやりした結晶に触れた、その途端――、

「えっ？」

ペンダントの真ん中のダイヤモンドが、一瞬ギラリと異様に明るく輝いた。と思ったら、二人の手の間で、お宝からまばゆい光の洪水が溢れ出した！

「うわっ!？」

白熱した火の玉のように見えて、オレはお宝を放り捨てようとした。でも、手の平がぴったりと石の表面に吸い付けられて離れない。見かけと違って、ちっとも熱くないからいいようなものの――。

光はどんどん強くなって、たまらずオレは目をつぶった。と、いきなり、足元の地面の感触が消える。

「ひゃあっ！」

「うおっ!?!」

まるで潮の大渦に捕まったみたいにな、オレ達の体はぐるぐる回りながらどこまでも下へ下へと落ちてゆく。

「わーっ! わーっっ! とーちゃん!」

オレは思わずアンバーにしがみ付いた。

「こら、落ち着け! こういう時は……、」

アンバーが何か言ってるけど、もう聞き取れない。ふーっ意識が遠のいていった……。

(第一章 王都シャンデリア に続く)

主要登場人物・国名紹介

「主要登場人物」

☆エメルダ

この物語の主人公・語り手。

金髪に緑の眼の、コランダム人移民二世。

元気で単純。盗賊稼業を続けていくには、多分お人好しすぎる。いつつも自分をからかって遊んでいるアンバールを、いっぺんいいからギャフンと言わせてやりたい。

基本的にシーフ性能（すばしっこさだけが取り柄であんまり戦力にならない）だが、弓の狙いの正確さは特筆に値する。

実は、相棒のアンバールにだけでなく、読者の皆様に対しても、とある秘密が……。

十三才。魔法属性は風。

☆アンバール

エメルダの商売敵……というが、勝率からいってアンバールの方はエメルダを歯牙にも掛けていない。

黒髪、琥珀色の瞳。彼もコランダム大公バルトーの血を引くからには、生粋のギヤマニア人ではないはず。

（エメルダに対しては、特に）無愛想で天の邪鬼。

剣の腕も立ち、学もある。実は相当育ちが良さそうなのだが、そんな彼が何故トレジャーハンターとして一人で生きてきたかは――、いずれ明らかに。

十八才。魔法属性は炎。

☆バルトー・ブルーサフィア

スターサフィア公国の第二公子。後のコランダム大公。兄・シア

ン、妹・マリーンの三兄妹。

銀髪に空色の眼。

温和でのんびりしているが、芯は強い……はず。（単に無頓着、無神経という説もあるが。）

特技はお茶汲み！？シトリンがいて、美味しいお茶さえあれば幸せという、欲の少ない奴。

二十才。魔法属性は土。

☆シトリンⅡトパーズ

ストールビア公の一人娘。

金髪に緑の眼。エメルダの母ちゃんに瓜二つ。

しっかり者の優しいお姉さん。

十八才。魔法属性は水。

☆ラピス

飛竜族の若者。両親はギヤマニア王国の飛竜狩りで連れ去られてしまい、弟のラズリと共に、従妹・パールの家族と一緒に暮らしてきた。

人間に変身している時は栗色の髪と碧い眼。

”竜の里”でも一、二を争う優秀な魔法の使い手で、次期族長の最有力候補。

そんな実力者であるにも関わらず腰が低いのは、長年お姫様のワガママに振り回され続けてきたためらしい……。

六十八才（竜族の寿命は三百年以上なので、人間に換算するとまだ二十才そこそこの”若者”）。魔法属性は風、水。

☆ガーネット

飛竜族の長の姫。赤い髪、赤い眼の人間の姿で、亡命中のバルトⅠ公子を助けて行動を共にしている。

勝ち気だが、世話好き、子供好きな一面も。

七十二才。魔法属性は風、炎。

☆プラータ

ギヤマニア王ジェイドの庶子。竜騎兵隊隊長。

黒眼黒髪、アンバールと姉弟のように似ている。

一見したところ派手好みで軽いノリのおネエさんだが……、目を着けられたら怖そうだ。でも、目を掛けられてもコワイ。

二十二才。火水風土全ての魔法が使える、史上稀な”マイティソーサ万能の魔術師”。

「国名」

★ギヤマニア王国

旅のスタート地点。竜騎兵隊などの武力により、スタールビア公国を併呑。スターサファイア、レクサンドラにも侵略の手を伸ばしつつある。

★スタールビア公国

ギヤマニア島の南方に位置する、コランダム島の西半分を占める。バルトーとシトリンの結婚によりスターサファイアと合併し、コランダム大公国に。

★自治都市コーラル

洋上の中立の貿易中継地として栄える群島国家。

★スターサファイア公国

コランダム島の東半分を占める国。エメルダ達の生まれた時代には、コランダム島はコランダム、スタールビア、スターサファイア、ブルーサファイアの四カ国に分裂している。

★オパール族長連合国

オパール大陸北部の、草原と沙漠の民の共同体。フリント沙漠以南は、地理も不明、人が住んでいるかどうかともわからない未知の世界。

★竜の里

オパールとレクサンドラを隔てるユークレイス山脈の中にある。

★レクサンドラ大公国

オパール大陸最北端の、レクサンドラ半島全域が領土。ギヤマニア島の東に位置する。

第1章 王都シャンデリア 「1」 へい、どい？

「チビスケ。おい、起きろ」

「う……ん？」

肩を揺すられて、オレは目を覚ました。

「大丈夫か？」

「うん、多分……」

体に、どこも痛い所はない。

「だったら、とっとと下りてくれ。野郎を上に乗せていても面白くない」

「あ」

オレはアンバールの胸に上半身をもたせかけるようにして倒れていた。がぼつと身を離すと、アンバールもゆっくり体を起こす。

その首に、円い金のペンダントが掛かっていた。

「ああっ！？お前、いつの間にかっかりそいつまで……！」

いつも巻いている緑のバンダナの上から、コツン、とアンバールはオレのおでこを叩く。

「これは俺のだ。お前さんののは、そら、そこにある」

と、オレの胸を指差した。

あらら？ 本当だ。

「え……？ 本物……？ だってこいつは、コラندانダム大公バルトーとシトリン妃の持ってた、この世に二つしかない……」

「ああ、そうだ。まさか、その片割れの持ち主がお前さんとはな。

驚いたぞ」

「げっ！ じゃあ、お前も……？」

「バルトー大公とシトリン妃の末裔……らしいな」

オレはまじまじとアンバールの顔を見つめた。

ああ、それで……。生粋のギヤマニア人なら、黒眼黒髪だ。アンバールは黒髪だけど、瞳は、光の当たり具合によっては金色にも見

える明るい琥珀色をしている。

コランダム人だけじゃなくて、レクサンドラ人や、オパール大陸の砂漠の民の血なんかも入ってるのかもしれない。国籍不明の、端正な顔立ち。

「ふうん……、じゃ、仕方ないな。お宝は山分けか」
って、あれ？お宝は？

オレがきよろきよろと辺りを見回すと、アンバールが首に掛かったペンダントをつまんで振って見せた。

「お前さんも、こいつの読み方を知っているんだろう。見てみる」
オレは自分のペンダントを月明かりにかざしてみた。すると――。
「嘘だろ……！何十里も南を指してる！？」

「矢張り、そうか。俺の目がおかしくなったわけじゃないんだな」
オレは満月を見上げた。時刻は、さっきからそんなに経ってない
ようだけど……。

「ちよつと待てよ。そもそも、ここ、どこだよ？」
さっきと同じ角度で、城の主塔が見える。だけど、何かが違う……？

ひび一つない城壁に垂れ下がる、ギヤマニア王国の国旗。塔の天辺には木の屋根が葺かれ、アンバールがぐぐってきた窓にも、鉄格子の内側から鎧戸が閉まっている。そして、歩廊の矢狭間からは、かがり火の光がちらちらと揺れ動いているのが見えた。

振り返ると、オレが乗り越えてきたはずの外城壁は無く、黒々と森が間近に迫っている。

ぞくり、と背筋に寒気が走った。

「どうということだと思う？」
今更ながら声を潜めて、オレはアンバールに尋ねてみた。

「さあて、な。一つの推測はつく。つくが……」
アンバールは手近に咲いていた白い小さな花を一輪摘み、指先でくると回した。そいつを鼻に近付けて匂いを嗅ぎ、顔をしかめる。
え、何で？いい匂いじゃん。

と、その時。

「誰だ？そこにいるのは！」

鋭い誰何の声が飛んできた。

オレ達はパツと立ち上がって身構えた。

やって来たのは、松明を掲げた兵士が二人。とりあえず亡霊や妖怪変化じゃなさそうだ。

アンバールは落ち着き払って、両手を広げて上げた。

「見ての通りの、旅の者だ。道に迷ったんで、ひとまず明かりの見える方に歩いてきた」

「旅？こんなとつぷりと日の暮れた後にか？」

「今夜は良く晴れた満月だ。行けるところまで行こうと思ってな」

兵士達はじろじろとオレ達を観察した。

「一人はコランダム人のガキか」

「怪しいな。聞き慣れない訛りだが、どこから来た？」

おいおい、訛ってるのはあんた達の方だろ。オレは気を付けているつもりでもしよっちゅう、コランダム訛りが強いって言われる。

だけどアンバールが喋るのは、きれいな王都の標準語——の、木で鼻をくくったように無愛想なやつ——だ。

アンバールが口を開いた、が、答えは突風と羽ばたきの音にかき消された。

月光を遮る巨大な影。

振り仰ぐと——、

で、ででで出たっ！化け物っっ！！

でっかい鳥……、じゃない。飛竜！？

体長は馬の三倍もあろうかという四つ足の、首の長い獣の背中に、蝙蝠みたいなかぎ爪付きの翼が生えている。そいつが悠然と羽ばたきながら、空中に静止していた。

「いたぞ！あっちだ！」

飛竜の背中にまたがった騎士——だと思う、身なりが良かったから——が叫んだ。長槍を脇にたばさみ、飛竜の二本の角にかけた手綱

を引いて、ビュンツと飛び去る。

兵士達がそれを追って走り出した、隙にアンバーは呆然と空を見上げていたオレの手首をつかみ、一散に森へ向かって駆け出す。

「あっ、待て！」

「構うな、放っとけ！ 奴を捕まえる方が大事だ！」

兵士達の声を後ろに聞きながら、オレ達は脱兎の如くとんずらをこいた。

1―〔2〕　"月の涙";草

ぜーっ、はーっ、ぜーっ、はーっ。

「どうやら、追ってこないようだ」

森を反対側まで突き抜けた所で、アンバールはやっと足を止めた。

「あ、あのなー……っ。オレとお前じゃ、歩幅が違う、んだから……」

オレは息を切らせてへたり込んだ。

草地に、さっきアンバールがつまんでいた白い花がたくさん咲いている。上品な香りがふんわりと、ほのかに闇に漂う。

アンバールがオレの横に膝をつき、今度は白い花を束にしてむしり取った。

「チビスケ、この花が何だかわかるか」

「さあ？知らないな。見たことないよ」

「俺も”見た”ことはない。が、この香りには覚えがある。……”月の涙”草だ」

「ツキノナミダ……？」

弓なりにになった細長い茎の先に、雫型につぼんだ白い小さな花が付いている。束にして横から見ると、三日月お月さんが涙を流してるみたいだ、ってわけか。

「魔力の濃い土地でよく育つそうだ。魔法時代にはそこら中に生える雑草だったが、今はごく限られた場所だけで栽培できる希少種だ。それを何千個も絞ってようやく一瓶採れる香水は、よほど上流階級の貴婦人でなければ使えない贅沢品なんだが……」

ふうん……って、あれ？

「おい、こら。そんなご大層なものの匂いを、何でお前が知ってるんだよ」

一瞬、余計なことを口走った、と後悔したように、アンバールは視線をさ迷わせる。が、すぐにフンと鼻先で笑って、気障っぽく前

髪をかき上げた。

「さあ、何でもだろうな」

……、……。深く考えないようにしよう。

「えーと、じゃあ、この花を集めたら一財産になるのか？」

オレはトレードマークのバンダナを外して広げ、早速その中に花を摘み集めようとした。

アンバーは溜め息を吐く。

「商魂逞しいな、お前さん。今考えるべきことが、他にあると思わないか？」

「あっ！」

オレはポンと一つ手を打った。

「そうだよ。ここは一体どこなんだ？さっきの空飛ぶ化け物は何なんだよ？アンバー、お前はわかるか？」

「見当はついている。が、あまりに途方もない……」

よく見たら、アンバーは冷や汗をかいているみたいだ。

「どうしたんだよ。わかってんなら、勿体ぶらずに言えよな」

アンバーは即答を避け、開けた丘の麓に目をやった。

「あれを見ろ」

城壁に囲まれた街の灯が見える。

「シャンドリア市……？」

あんなに大きかったつけ。それに――、

「河が……」

「そうだ。北側の城壁の背後を河が流れているだろう」

アンバーは振り返った。

「そして、こいつだ」

城へ続く森の入り口に、オークの大本が二本立っている。

「お前さん、来る時どの道を通った？」

「シャンドリアの街から丘を登って……」

「俺もだ。昔の登城ルートは両側にオークの木があった。一本は倒れた老木からの孫生えで、もう一本は根本に大岩を抱き込んでいた」

アンバーは年取った方の木のうろを覗き込んだ。

「こいつが、老木にあったうろ」

そして、若い方の木の隣にある岩を撫でた。

「こっちは、木の根に飲み込まれていた岩だ」

言われてみれば、形が似ているような気も……？でも、はつきり覚えてないし。

「つまり？」

「ここは、魔法時代のシャンデリア市だ」

「……、へっ!？」

「恐らく、魔竜戦争の直前、丁度現代から三百年前ぐらいのな。そう考えれば、全ての説明がつく」

あっ……、そうか……!

シャンデリア城の外城壁は、魔竜戦争後、世界の魔法の力が失われてから増築された。

その後百年ぐらい経つと、河の流れが変わってシャンデリア市は生活用水と交通の便が悪くなってしまった。王都は北方のペリドット市に遷都されて、シャンデリア城は廃墟となり、城下町の人口は最盛期の十分の一ぐらいまで減少したんだ。

飛竜も”月の涙”草も、魔法時代なら当たり前の存在。兵士達の話していた聞き慣れない言葉は古語だった、ってことだ。

「だけど、どうして……!？一体何が起こったんだよ？お宝の魔力のせいなのか？」

「そこまでは、俺にもわからん。わからんから……、なあ、エメルダ」

アンバーがオレを名前で呼んだ。

「何だよ。改まって」

「一時休戦にしないか」

「ああ？」

「この状況下では、手を組んだ方が得策だと思わんか。元来た場所に戻るまで」

何でお前なんかと。と、いう言葉をぐつと飲み込んで、オレはしぶ手を差し出した。

「……賛成」

「よし、決まった」

アンバーはパシッとオレの手を軽く叩いた。

「まずは宿を探すぞ。何か腹に入れるのと、情報収集だ」

アンバーはさっさと、街へ下りる道を歩き始めた。

「えっ、でも、とくに城門が閉まってるだろ」

街の城門は、日の出もしくは一番鶏の声で開き、日没と同時に閉じる。今も昔も変わらない習慣のはずだ。

「今が魔法時代なら、シャンドリア市の下町は城壁の外まで拡張している。どこかに、開いている宿もあるだろう」

アンバーは立ち止まらず、振り向きもせずに言った。

「あっ、待てたら！だから、オレとお前じゃ歩く速さが全然違うって言うてるのに」

オレは早足で追いかけた。アンバーが三歩歩く間にオレは四歩歩くぐらいじゃないと、付いていけない。

「ほう、ようやく自分がチビだと認める気になったか」

「オレがチビなんじゃない。お前がでかすぎるんだよ」

くそー、癪に障るなあ。早いとこ帰る方法を見つけて、相棒なんか解消したいよ。

1—〔3〕 モーガンとゴーシェ

オレ達が城下町に辿り着いたのは、※夜の風の刻の終わり頃（※午後九時頃）だった。

宿屋はすぐに見つかった。民家や普通のお店はもう寝静まっていて、明かりが点いているのは酒場とか賭場とかの、”夜の商売”の店ばかりだったからね。

オレ達はまず泊まる部屋を確保してから、一階の食堂に行った。ガラの悪い連中が酒を飲み交わしていて、かなり騒々しい。時間帯のせいもあるかもしれないけど、行商人や巡礼者みたいなカタギのお客がいない。

いわゆる”盗賊宿”——金さえあれば、追剥ぎや密猟者とかの、明らかに後ろ暗い連中をそうと知りつつ泊める宿——ほどじゃないよ。でも、傭兵とか賞金稼ぎとか博打打ちとか……、犯罪者でないまでも限りなくそれに近い奴らが客層みたいだ。

「白葡萄酒を一瓶。辛口のやつを」

アンバーは少し声を大きくして注文した。

「オレにはホットミルクを一杯。蜂蜜も入れてね」

って言ったら、案の定、アンバーは喉の奥でくっくつと笑いやがった。

「道理で乳臭いはずだ」

「オレは成長期なんだよ。牛乳たくさん飲んで、背を伸ばすの！」

それにさ、これはオレの方針なんだよ。初めて入った店では、最初に必ず酒じゃない飲み物を頼むことにしてるんだ。

店のオヤジは無愛想で、にこりとも笑わなかったけど嫌な顔もせず、淡々と蜂蜜入りのホットミルクを作ってくれた。

よし、大丈夫。これで、店主までも見下してきたりとか、ソフトドリンクは用意してなかったりしたら、今のオレにはちよつと危ない店だってこと。

二人とも”仕事”の前に晩飯を食ってきたから、食べ物塩味の固焼きビスケットを二人で一山だけにした。

注文の品が揃ったところで、アンバーは真新しいカラート銀貨をオヤジに手渡す。オヤジはちらりと目を落とすと、黙ってつつ返してきた。

「ああ、すまない。間違えた」

と、どこかの遺跡で拾ってきたらしいディラム古銀貨と交換すると、今度はすんなり受け取った。

矢っ張り……。

テーブルに着いたオレは、ふーっと溜め息を吐いた。

と、アンバーがオレの目の前にコップをつき出してきた。牛の角を薄く削って、木の持ち手を付けたやつだ。

「ほい、乾杯」

と、オレはホットミルクの入った自分のコップをコッスンとぶつける。

「違うだろう……」

アンバーは、トントン、と空っぽのコップの底をテーブルに打ちつけた。

「年長者は敬え」

いや、”酒を注げ”って意味なのはわかってるけどね。

「敬いがたいんだよ、そのヒトを馬鹿にしくさった態度がさ」

アンバーは余裕の薄笑いを浮かべた。

「ほう、お前さんこそ、そんな可愛げのある態度を取っていいのか？相棒を組まなければ、より困るのはお前さんの方だと思うんだが……」

と、言われた矢先に。

「珍しいじゃねえか、ヒック、え？コランダム人のガキが、王都に何の用だ」

赤ら顔の酔っ払いが、じつとりと湿った手でオレの肩をつかんだ。

傭兵崩れだろう。がちりした体格で、額と頬に大きな古傷の跡がある。

戦斧を背負ってるけど、鎧兜はなく、防具といえばボロツちい布の綿入れ胴着を着けているだけだ。大方、飲み代に売ったか、賭けに負けて巻き上げられちまったってクチだな。

「ヒック、スतालビアのスパイじゃないだろうな、ああ？」

酔っ払いは、長いこと手入れしてないらしいもじやもじやの髪と髭に覆われた顔を近付けて、酒臭い息を吐きかけてきた。

「お姫さんはまだ逃亡中だそうじゃねえか、ウィック。男に化けてるなんてえことは……」

肩に置かれた手が、いやらしい手付きで胸に滑り下りてくる。

「放せよっ」

オレは払いのけようとした、が、それより早く、アンバールの手が酔っ払いの手首をがっしりと取り押さえた。

「コランダム人のお袋が故郷くにに帰ってから生んだ弟だ。他に身寄りが無いんで、俺が引き取った」

いや、さ。”嘘は泥棒の始まり”っていうぐらいで、オレ達の必須技能ではあるけどね。よくまあ、こうもスラスラとナチュラルに、口から出まかせが言えるもんだよ。さっき城の前で訊問された時といい、こいつのクソ度胸には恐れ入るぜ。

それに、この馬鹿力。アンバールは涼しい顔して、スーッと酔っ払いの手を押し下げ、ビタツとテーブルにくつつける。酔っ払いが丸太ん棒みたいな腕に血管を浮き上がらせて振り解こうとしても、びくとも動かないんだ。

「この野郎……ッ！」

酔っ払いはもう一方の手を拳骨に握り締めた。

あわや喧嘩になるか、と思ったら――、

「よせ、モーガン」

歴戦の傭兵と覚しき風格のある、二十代後半ぐらいの男が水を差した。

「シトリン姫は十八だ。いくら何でも、そんなやせっぱちのチビのはずがないだろう」

モーガンと呼ばれた酔っ払いの大男は、年下だけど格上らしい傭兵の男を睨んだ。

「ゴーシェ！今は貴様の部下じゃない。ヒック、指図は受けねえ！」

「……勝てんぞ」

お前のために言ってるんだ、そんなこともわからないのか——と呆れたような口振りで、傭兵隊長ゴーシェは言った。

酔いが醒めたのか、傭兵崩れのモーガンは振り上げた拳を下ろした。アンバールが手を離すと、手首にくっきりと指の跡がついている。

「……、ふん！」

手首を振ってほぐしながら、千鳥足で二階の宿へ続く階段を上っていった。

「“やせつぽちのチビ”はないだろ」

と口を尖らせたオレの頭を、アンバールがくしゃつと押さえ付けた。

「生意気な弟ですまん。助かった。礼を言う」

「助かったのはあいつの方だろう。俺に免じて、許してやってくれ」

ゴーシェが自分の酒瓶から注いだ酒を、アンバールはぐいとあおった。かなり強い焼酎みたいだ。

「仕事がなくなって荒れているんだ。あれでも、腕利きの傭兵だったんだが……」

どこかで聞いただろう。スタールビア公国の国境守備隊五百人を、たった一人の女将軍が全滅させた……という話は「

アンバールは当たり障りなく相槌を打つ。

「ああ。相当尾ひれが付いているんだろうが」

「尾ひれなんかじゃない。街で流れている噂程度じゃ、言葉が足りんぐらいさ。」

プラータっていう、俺より若い別嬪さんだったんだがな。その時の功績で、今じゃ竜騎兵隊の大將になっている。

俺達はこの目で見たんだ。地上部隊の援護など必要なかった……どころか、足手まといになるんで敵さん諸共ぶっ飛ばされちゃった。

正しくは、一人と一頭の仕業だな。乗ってるバカでっかい軍用竜が、またとんでもなく強くてなあ。魔法の一撃ち、飛竜の体当たり一回ごとに、十人二十人ってまとめて薙ぎ倒していくんだ。

正規軍にあんな化けモンがいたんじゃ、俺達は商売上がったしさ」
ゴーシエはかぶりを振った。

「隊長ーっ」

呼ばれて、ゴーシエは仲間の傭兵達のテーブルに戻ろうとし、去り際に、アンバールのコップに酒を注ぎ足す。

アンバールはコップを高く持ち上げて、乾杯の仕草をした。

「良い仕事が見つかればいいな」

「ああ、お互いそう祈ろう」

ゴーシエはアンバールのことも、用心棒の類か何かだと思ったみたいだった。

キューツと一息に飲み干して空になったコップに、オレは葡萄酒を注いでやった。

「ありがと、”にーちゃん”」

小声で、なるたけ素っ気なく言った。

認めないわけにはいかない。黒眼黒髪ของギヤマニア人の中で、オレの金髪と緑の瞳は目立つ。この時代、コランダム人は単なる”外国人”じゃなくて”属国民”・”敵国民”だから、風当たりが強いんだ。確かに、不利なのはオレの方だ。

「わかれば結構」

アンバールは一杯飲み終わると、また当たり前前みたいにオレの方にコップを差し出す。

わかってても……、何か矢っ張り、腹が立つ！

1―〔4〕 魔法時代

固焼きビスケットを、オレはホットミルクに、アンバーは葡萄酒に浸して食べながら。

オレ達は主に、ゴーシェと仲間の傭兵達の会話に聞き耳を立てた。
「スターサフィアのバルトー公子も、まだ捕まらないんだってな。懸賞金が一千万ディラムに上がったそうじゃないか」

「山分けしても一人百万ディラム以上……、ヒョーツ、一生働かなくていいぜ！」

ゴーシェが、つまらなさそうに諭す。

「そんな虫の良い計算があるか。一千万ディラムといえば、軍隊が丸一個雇えるほどの金額だ。そこまでする必要のある相手だということさ」

「プラータ將軍に引けを取らない魔法剣士だって噂だもんな」

「懸賞金は、公子を匿っている貴族や抵抗軍に、組織ぐるみで寝返るよう促すためのものだな。俺達に手の出せる獲物じゃない」

「飛竜狩り隊に参加するのとかは……」

「ギヤマニアでもコランダムでも、はぐれ飛竜はほとんど狩り尽くしてしまった。これ以上はユークレイス山脈の”竜の里”に踏み込むしかないだろう。魔竜騎兵隊以外には無理だ」

「あーあ、地道に魔獣退治で稼ぐしかねえのかなあ」

「だけどよ、最近、前と同じ種類の魔獣でも、どんどん強くなってる気がしないか？ 数が増えて、一匹当たりの報酬は減ってるってのに」

「泣き言言ってる暇があったら、少しでも儲けのいいターゲットを探した方がいい。……貿易商組合の方で何か収獲はなかったのか？」

「それが、レクサンドラ方面から陸路で来たって毛皮商が言うには……、」

その後は、地名やら魔獣の名前やらがわんさか出て来て、具体的

な仕事選びの相談になった。

聞いているとどうやら、魔獣っていうのは、狼や熊みたいな猛獣とは全然性質の違うモノらしい。普通の野生動物や家畜や、時には人間が、ある日突然化け物に変身してしまうんだって。例えば、牧羊犬が牛ぐらいにバカでっかくなつて、食うわけでもないのに羊の群れを全部噛み殺しちゃったりするらしい。

一度魔獣に変身した動物や人間を元に戻す方法はなくって、被害を食い止めるには殺すしかないとか……。ゾツとしないな。

傭兵達の話聞いてるうちに気持ち悪くなつてきて、オレは、ミルクに浸してもビスケットが喉につつかえるようになってしまった。でもアンバーは平然と、結構速いペースで飲み食いしている。オレは葡萄酒の瓶を逆さまにして、最後の一杯を注いでやった。まるで顔色変わってないよ、こいつ。オレなんか、麦酒^{ビール}一杯でもほつぺた赤くなつちゃうのにな。

と――、

ゴシエ達とは別のテーブルで飲んでいた、矢張り傭兵らしいおっちゃんが、ぽんとオレの肩を叩いて愛想良く笑った。反射的に挨拶代わりに微笑み返すオレ。

おっちゃんはアンバーの横に行き、にこやかに何事か耳に囁いた。

アンバーはちよつと眉をひそめた。

「おい、この御仁が、銀貨五枚でどうかって言ってるんだが。お前さん、どうする？」

「どう、って？……あっ！」

意味がわかったオレは、両手と首をぶんぶん横に振った。

「じよっ、冗談じゃないぜ！」

そう。オレ様は、まだ声変わりもしてないカワイイ美少年だからね。時々、そっちのケのある奴がコナかけてくるんだよ！

なおも残念そうに食い下がるおっちゃんに、アンバーは友好的な感じで手を差し伸べた。つられて出されたおっちゃんの手を、み

しみしと骨の軋む音が聞こえそうなら強い強く握る。さっきも使った手だね。

おっちゃんは、すごすご引っ込んだ。

「そんな、始めっから断ってくれよ！」

「いや、俺はお前さんの普段の暮らしぶりを知らん。もしかすると、稼げるなら何でもやる主義かもしれないと思って」

うーん……、それもそうだ。少なくとも、オレの意思も確かめずに売り飛ばしたりしなかったんだし、相棒として信用出来る態度といえるだろう。……信頼はしないけどさ。

「そういうお前は？」 本業” 以外にも何かやってんの？」

「賭けでも、食費を浮かす程度には勝てる。ただし、将棋とか腕相撲とかの、実力勝負に限るぞ。運やら神様やらは当てにしてないんでな」

アンバーはちらっと、店の隅の席に目をやり、低い声で付け足した。

「特に、こういう雰囲気のお店ではお断りだ」

札遊びをしている客の一方が、どうも” 本職” のイカサマ師らしい。誤魔化したの、言い掛かりだのと、それぞれの仲間を巻き込んで喧嘩になりかかっている。

他にもスケベっぽい目付きでさっきからオレの横顔を眺めてる奴もいるし、全体に、酔いが回って話し声が大きくなるのに反比例して、話の中身が薄くなってきたり……。

「そろそろ二階に上がらない？」

「頃合いだな」

オレ達は席を立った。

1―〔5〕 ダイヤモンド・スピリット

部屋に入って、今聞いた話を整理してみると。どうやらオレの方が耳がいい――のかどうか知らないけど、喧噪の中で会話を聞き取るのが上手いことがわかった。

父ちゃんが生きてた頃は、メンバーが常時三十人以上はいる、おっきな盗賊団で暮らしてたんだもんね。食事時なんかいつもすごい騒ぎで、誰かとしやべりながら後ろで他の奴が話してることも聞いたりとかな、慣れてるんだ。

ふー、一つでもアンバーより得意なことがあって良かったよ。世話になるばかりで、お荷物だと思われちゃ嫌だもんね。

「矢張り今は、魔竜戦争の直前だな。スタールビアがギヤマニアの属国になって、スターサフィアも圧力をかけられている頃だ。シトリン姫とバルトー公子は、それぞれ逃亡生活を送りながら抵抗軍を組織中……。二人が結婚してコランダム大公国を興すまで、あと一年といったところだろう」

オレ達はトレジャーハンター（宝探し屋）――平たく言って盗掘師、もっとミもフタもなく言っちゃえば墓泥棒だ。昔の城跡や墳墓に眠るお宝をメシの種にしている。

当然、歴史や古文解読の教養もあるんだけど、それにしてもアンバーは随分よく勉強してるみたいだ。オレには聞き取れても意味のわからなかった言葉とか、時代背景とか、全部解説してくれた。

「何でこうなっちゃったんだろ？ やっぱ、あのお宝に魔法の力が残ってたのかな……」

「その、”例のお宝”のことだが。お前さんは、どこまで知ってるんだ？」

アンバーはベッドに腰掛けて、長い脚を組み、前髪を指で梳りながら尋ねた。

椅子の背もたれに寄り掛かって、斜めになった天井を見上げてい

たオレは、姿勢を正した。

「"ダイヤモンド・スピリット"。七つ集めればどんな願い事も叶うっていう、魔法の宝石……だろ」

「それは、民間伝承レベルの知識だな」

アンバールは鼻先でフンと笑った。あ、また馬鹿にしてる。

「お前さんはダイヤモンド・スピリットを、中から魔神が出て来る"魔法の壺"か何かの仲間だとも思っているのか？」

「違うのかよ？」

「違うな。"どんな願いも叶う"というのは、言葉の綾だ。そうだな……例えば、"一国の王になればどんな望みも思いのままだ"というのと同じほどの。王になれば、莫大な富や武力権力でもって、庶民には到底手の届かない様々なことを実現できる。だが王といえども、死人を生き返らせたり、太陽を西から昇らせたり出来るわけじゃない」

「それじゃ、ダイヤモンド・スピリットの正体は？」

「"魔力の増幅器"……とでもいおうか。土木工事の現場で、滑車やコロを使って重い荷を運んでいるのを見たことがあるか？ あんなものだと思えばいい。人間の魔力の限界を超えた、とてつもなく強力な魔法を操れるようになるんだそうだ」

アンバールの説明によると、七つのダイヤモンド・スピリットのうち六つは、この世界を司る二神四皇——太陽神、月神と、水火風土の精霊皇——の力に対応しているらしい。どれか一つ持つだけでも、並の魔法使いの数十倍の強さになれる。六つ集めて、それぞれの力を自在に引き出せる"鍵"のダイヤモンドを使えば、更にその数百倍、数千倍もの絶大な力になるとか。

「時を飛び越える魔法も、理論だけは研究されていながら、人間の魔力では不可能と言われていたはずだ」

「あの時、何かのきっかけでお宝の魔力が引き出されたってわけか……」

「恐らく、こいつだ」

アンバーは金のペンダントを振った。

「この真ん中に付いているのも、ダイアモンド・スピリットのおかげらだそうだ」

「ひょえーっ、そうなの？」

「知らなかったか。まあ、無理もない。俺も、こいつを譲り受けた時には何も聞かされなかった。長いことかかって、自分で調べ上げたんだからな。……それと、お前さんは一つ間違えてるぞ」

「何だよ」

「ダイアモンド・スピリット自体に魔力はない。荷車が、誰も押さないのにひとりでに荷物を運んだりはせんようにな」

「……というと？」

アンバーは自分とオレを指差した。

「多分、魔法を使ったのは俺達自身だ」

「えっ！？ だってオレ、呪文も何も知らないよ」

「俺もだ。だが俺達は、バルトー大公とシトリン妃の子孫だ。稀代の魔法使いだったという二人の素質を受け継いでいたんだろうな」

オレは腕組みして、唸った。

「うーん、すると、元の時代に戻るには……」

「こいつは推測だが……、同じ状況を再現する必要があるだろうな。まずはダイアモンド・スピリットを手に入れること。そして俺達二人が、今度は偶然ではなく、確実に魔法を使えるようになること」

「お宝の方は、またこのペンダントを使って探し出せるだろうけど……、魔法って、どうすりゃいいんだよ？」

「さあな……、差し当たって、本でも調べてみるか。魔法時代のシヤンデリア市には国内最大規模の公立図書館があって、誰でも自由に閲覧できたはずだ」

「何日ぐらいかかるんだろ。路銀、足りるかなあ……」

二人が持っていた古銭を合わせると、一ヶ月位はそこそこ困らないだろうと思われた。

オレ達の時代のカラート銀貨、金貨も、潰して地金にすれば使え

るだろうけど。古代よりも銀や金の含有率が低いんで、かなり価値が目減りしちゃって勿体ない。

”仕事”をするにも、三百年前ともなれば大分勝手が違う。遺跡の情報とか、一から調べ直さなくちゃならないし……。

「足りなくなったら、そうだな、俺達も魔獣退治に挑戦してみるか？その腰に差してるのは飾りじゃないんだろう、チビスケ」と、アンバーはオレの短剣を見て言った。

「何なら、今ここで腕前を見せてやろうか？こういう狭い場所だったら、お前のデカブツより分がいいぐらいかもな」

「そいつはおっかないな、遠慮しておこう」
アンバーは軽く笑って受け流した。

オレは短剣の鞘に掛けていた手を離し、ふんと胸を張った。
「弓だって名人級なんだぜ。そりゃ、強い弓は引けないけどさ、的はバッチリ外さないんだから」

「ああ、そうだろうとも。見事なものだった」
ハッと、ついオレの目と声が陰しくなった。

「……見てたのかよ」

親父が公開処刑された時のことだ。

貴族や大商人を何十回って襲撃してきた”凶悪犯”だから、ただの縛り首じゃ済まない。少しずつ皮を？がれたり、手足の指を一本ずつねじ切られたり、じわじわと時間をかけてなぶり殺しにされる予定だったんだ。

オレは親父が長く苦しまないように、処刑場の広場の外から、一撃で親父の心臓を射抜いた。仲間に、一番強い自動弓の弦を巻き上げ機でギッチリ引き絞ってもらって、それから狙いを定めて引き金を引いたんだ……。

「俺だって、いつ何時しょっぱかれるともわからん身の上なんだぞ。冷やかしいじゃない。」

ボンクラ貴族どもをキリキリ舞いさせた、あっぱれな義賊の面構えを拝んでみたかったのさ。……お前さんは、母親似なんだな」

「悪かったな、不肖の息子で」

「多分お前さんが思ってるよりは、俺はお前さんを買ってるつもりだぞ、チビスケ」

アンバーはくしゃくしゃと、俺の金髪頭を撫でた。

「だったらチビって言うなよな」

ぶーたれるオレを無視して、アンバーは伸びを一つすると、さっさと上着とブーツを脱いだ。

「さて、もう寝るか。明日は、街の門が開いたらすぐ図書館に行ってみよう」

あの一、そのことなんですけど。

「何でベッドが一つなんだ？」

「文句は宿のオヤジに言え。俺は二人分頼んだぞ。こういう安宿にはよくあることだ。混んでる時は、見知らぬ同士三人ぐらい一つのベッドに詰め込まれることもある。その分、元々料金は安いようだが……」

アンバーは、胸に掛けていたペンダントをズボンのポケットに押し込み、さっさと上着を脱いでベッドに横になる。

「明日からは、もう少しまとまな宿に泊まった方がいいな。勝手に他の客と相部屋にされたりすると、打ち合わせに差し障る」

「オレ、床で寝るわ」

オレは荷袋を枕に、マントを体に巻き付けて、ごろりと床のマットの上に寝転がった。

「何を警戒しているんだ。俺は女しか抱かんぞ」

「……。女の人なら抱いたことあるんだ……。どのくらい？」

「数なんか気にしてるうちはガキだ」

うっわー、遊び慣れてそう……。

アンバーはひよいとオレを抱え上げて、ベッドに下ろした。

「何すんだよ!？」

「床は冷える。風邪を引くぞ。俺の足を引っ張りたいでなければ、しっかり休んで疲れを取っておけ」

「……」

うーん……ここまで言われて意地を張ってちゃ、信用してないみたいで感じ悪いよな。しょーがないか……。

オレはショートブーツを脱ぎ、腰のベルトと髪の手紐を解いて、布団に潜り込んだ。

「服も脱いだ方が楽だろう」

「嫌だよ、野郎同士で素肌をくっつけて寝るなんて、気色悪い」

あー、矢張りこいつ、体がでかいなあ。狭っ苦しい。

「お前さん、こんなに伸ばしていて邪魔くさくないのか」

背中合わせになったアンバーは、くすぐったそうにオレの髪を払った。母ちゃん譲りの蜂蜜色の髪は、脇の下ぐらいまでの長さがあるって、いつもは首の後ろで一本にまとめてるんだ。

「伸ばしっぱなしの方が手間がかからないよ。しょっちゅう切らなくて済むもんさ。きっちり縛れば、短いのがワサワサまとわりつくより、かえってシャキツとするし」

「そんなものか？」

アンバーはちよつと身をよじったけど、十も数えないうちにぐっすりと寝息を立て始めた。早っ！

……あふー。オレもたちまち眠くなってきた。

誰かと一緒のお布団で寝るのなんて、何年ぶりだっけ？

アンバーの背中がぬくい……。酒が入って血の巡りが良くなってるんだな。何だか……父ちゃんを思い出す、なあ……。

1—〔6〕 真夜中の訪問客

「おい、起きろ」

耳元で呼ばれて、オレは寝ぼけ眼をこすった。

「う……ん？ 何だよ父ちゃん、まだ真っ暗じゃないか。もうちょつと眠らせてくれよ……」

もう一度目を閉じて、布団をひっかぶる。

「起きろ、チビスケ」

……、父ちゃんの声じゃないっ！

「げっ！？ お前……っ！」

アンバーが横に寝てるのをすっかり忘れてたオレは、慌てふためいて叫び声を上げそうになった。

アンバーは、ガバツとオレの口を手で塞ぎ、早口に囁く。

「静かに！」

わーっ、わーっ！ 何すんだよー！ 放せよーっ！！

「落ち着け。敵が来る」

……、……？

”敵”の一言に、水をぶっかけられたみたいにシャッキリ目が覚めた。

「敵？……誰？それとも……、何？」

オレも、枕元の短剣をつかみ、囁き声で訊いた。

「わからん。人か……獣なのかさえ。こんな妙な気配は初めてだ。お前さんは、何か感じないか？」

オレは耳を澄ませた。

窓を揺らす、隙間風の音。隣の客のいびき。近く別の宿から漏れてくる、酒場女の嬌声。猫が喧嘩する声、夜鳴き鳥の声。微かに街の城壁にこだまする、河の音。……

特に変な物音は聞こえない。なのに、何だろう？ ちりちりと胸騒ぎがする。

「わかんない。でも……、気のせいじゃないってことだけは、わかるぜ」

アンバーはゆっくりと、まずカーテンを、次に窓の鎧戸を開けた。……とりあえず、外に怪しいモノはいないみたいだ。

満月の青白い光が部屋の中を照らした。時刻は、草木も眠る水の刻（※午前二時頃）ってところか。

窓から吹き込む風は、ひんやりと湿っている。

あちこちの食い物屋さんの残り香や、生活排水の生臭い匂い、山から漂ってくる春の花の香りなんかがごちゃまぜになった、かぐわしいとは言い難い空気だ。でも、異臭はしない。

ピンと張り詰めたオレの神経に最初に引っ掛かったのは、ギシ、ギシと廊下の床板が軋む音だった。

客の誰かが共同便所に行こうとしている——というのとは様子が違う。一歩ごとの足取りがやけにのろい上に、時々立ち止まっては、フンフンっと動物が匂いを嗅ぐように荒く鼻で息をしている。

こっちに来るまでにはまだ時間がありそうだ。オレは急いで髪を結わえ、腰にベルトをきつく締める。キリツと気分が引き締まった。ブーツは、履かない方が自由に動けそうだな。

”敵”がオレ達の部屋の方へ近付くにつれ、足音だけでなく、床が沈み込む振動まで伝わってきた。

アンバーは扉を正面にして、床に片膝ついてしゃがみ、鞘を払った長剣を肩に担ぐようにして構える。

この部屋は狭い。扉から入ってきたヤバイモノを仕留めようと思ったら、立ち上がりながら振り抜く最初の一撃で決めなくちゃならない。

アンバーが無言で顎をしゃくった。オレも黙って頷き、そろりと扉に近付く。

フンフン、フンツ……フハァーア。

”誰か”——あるいは”何か”はオレ達の部屋の前で、他の場所より長く立ち止まり、念入りに匂いを嗅いでいる。そして、大きく

息を吸い込み……、

バキヨッ！！

「「っ！！」」

アンバールとオレは横に飛び退いた。

”誰か”が入ってくるとしたら、扉の隙間からそろーっと掛け金を外すとか、そうでなけりゃ、何度か体当たりするとか斧で叩き割るとかして鍵をぶっ壊そうとするんじゃないかと思ってた。

何にしろ多少手間取るはずだから、その間に不意を突いてこっちから扉を開け、機先を制するつもりだったんだ。

まさかそんな暇もなく一撃で、戸板が蝶番ごと外れて、窓枠にぶつかるほどの勢いで吹っ飛んでくるなんて！

ぬうっと、ぶっとい、毛むくじゃらの腕が部屋の中に伸び、頭と、反対側の肩が戸口をくぐり抜けてきた。

大男……、なんてもんじゃない。身の丈十尺（※約三メートル）はある。肩幅が広すぎて、正面向きじゃ部屋ん中に入れなかったんだ。っつーか、横向きでも、胸板の厚みだけで戸口につっかえそうなぐらいだ。

……人間じゃねーよ、こいつ。

巨人が無造作に足を踏み出す、その足元を見たオレは、滑り込みながらサッと床のマットを引っ張った。

巨人はつんのめって戸板の上に倒れる。その弾みを利用して、アンバールは窓枠に立て掛かった戸板をテコの原理で押し上げ、巨人の体を窓の外に放り捨てた。

「起きろ、起きろ！化け物だ！」

アンバールが大声を張り上げる。

たった今扉が壊れた大きな音で、とっくに周りの奴らも起きてるだろ？……って、カタギさんなら思うんだろうけどね。

どっこい、こういう宿に寝泊まりする連中って、物騒なことに慣れっこになってるから。喧嘩や、酒盛りのどんちゃん騒ぎで派手な物音がすれば、ちょこっとは目を覚ますかもしれない。でも、自分

には関係ないやって思ったらまたすぐにグースカ眠っちまえるぐらい、神経が図太いんだ。

裏通りの路面に落ちた巨人はグウツと低く唸ったけど、ほとんどダメージを受けなかったみたいだ。異様に長い腕で、ガツと窓枠に飛びついてきた。

ニュツと窓から突き出した顔面を蹴って、アンボールはもういっぺん巨人を突き落とす。立ち上がりかけた巨人の猫背めがけて、戸板を投げ落とし、その上に飛び下りてクッションにしながら地面に着地した。オレもアンボールに続いて、表に出る。

巨人は忌々しげに頭を振り、戸板の両端をつかむと、バキンツ！と煎餅みたいに簡単にへし折って脇に放り捨てた。

じょーだんだろ、おい……。

”巨人”といっても、体の比率が並の人間とは全然違う。脚はカブのように太い短足、胸から肩の筋肉は異様にムキムキと盛り上がり、腕は、ちょっと前屈みになっただけで地面に届くほど長い。

一本一本の指がオレの腕ほどにも太い、あのごっつい手に捕まったら、オレの頭や胴体なんか一ひねりに握り潰されてしまうだろう。

「無事かつ？」

ゴーシェと仲間の傭兵達が、宿の表から、道路の反対側に回り込んできた。巨人を挟み撃ちにする格好だ。

巨人は横向きになって、ゴーシェ達とオレ達を左右に見比べる。

「まさか……！」

「モーガン……！？」

傭兵達が動揺している。

うそっ！？でも、言われてみれば確かに……！

ケダモノじみた凶暴な人相だけど、目鼻立ちや、もじやもじやの髪型や、何より頬と額の見覚えのある傷跡に、モーガンの面影がある。素っ裸の体の足首に、ズボンの切れっ端らしきボロ布が引っ掛かってるけど、そーいやあんなの着てたような……。

傭兵モーガン………だったかもしれない怪物は、ゴーシェ達よりも、

オレとアンバールの方に向かってきた。オレ達は剣で牽制しながら、走って後退する。

ここじゃ、このバカでっかいのと闘^やり合うには狭すぎる。広い場所に出ないと……。

大通りと交差する十字路、でもまだ狭い。水汲み場のある広場まで退いたところで、アンバールは怪物に向き直った。

1-〔7〕 人間じゃねーっ！

ウンガーッ！！

怪物は家々の壁がびりびり震えるほどの雄叫びを上げて、戦槌みたいな握り拳を振り下ろした。アンバーが飛び退いた、あとの石畳がボコッとえぐれる。

怪物が振り上げ、振り回し、突き出してくる両の拳をかわしながら、アンバーは隙を窺っている。

アンバーだって長身で手足が長い上に、刃渡りが四尺ぐらいもある両手持ちの長剣が得物なんだから、リーチは相当なものだ。でも、身の丈十尺の巨人が相手じゃ、なかなか剣の届く範囲に急所をとらえられない。まして、オレの短剣なんかじゃ……。

怪物は拳を開き、今度はアンバーを叩き潰そうと、平手を打ち下ろしてきた。爪がザクツと地面をつかんでめり込んだ。その腕を踏み付けて間合いを詰め、アンバーは怪物の首を横薙ぎにする。

よし、殺ったっ！……と、思いきや。

「っ！」

長剣は、怪物の首の付け根に二寸と食い込まずに止まった。よっぽど、皮膚なり筋肉の束なりが硬いらしい。

マジかよっ！？今の、並の人間だったら胴体が真っ二つになるくらい威力はあったぞ！

怪物はアンバーを宙に跳ね上げ、もう一方の腕を振り回して横に殴り飛ばす。アンバーは受け身を取った、が、衝撃を逃がしきれずに地面を転がった。

やばっ！

オレは咄嗟に、こぼこぼと水を吐き出し続けている水汲み場の取水口を手で押さえた。水の流れを変え、ブシューッと勢いよく怪物の顔面に吹きつけてやる。

怪物はアンバーを追撃しようとしていた手で、思わず水を遮っ

た。その間にアンバーは咳き込みながら跳ね起きて、怪物との距離を取り直す。

怪物はぶるぶるんつと頭を振って水を振り飛ばし、オレとアンバーとどっちから攻撃しようかと迷って動きを止めた。そこへー、バサッ。

傭兵達の投げた網が、頭からすっぽりと怪物に被さった。

ドツドツ、ドツ。

間髪入れずに、自動弓の矢が三本怪物の背中に突き立ち、戦槌や槍を持った傭兵達がワツと一斉に怪物に襲いかかった。

そうそう。”正々堂々一騎打ち”なんかする必要ないの。こいつは人間っていうより、猛獣の仲間だよ。袋叩きにするに限る。

ところが……、

「何イッ!？」

怪物の、鋼のような筋肉の鎧は、槍も棍棒も跳ね返してしまった。自動弓の矢だって、至近距離から撃ったのに、矢尻の先一寸くらいしか刺さっていない。こいつ、すっぽんぽんのくせして、重装甲兵並みの防御力があるんじゃないか？

怪物は丈夫な縄で出来ているはずの網を内側からむんずつとつかみ、ブチブチッと引き千切って自由の身になった。げげえっ!？

怪物がブンツと長い腕を一振りすると、傭兵の一人がぶっ飛ばされて石壁に激突し、呻きながら地面に崩れ落ちた。他の傭兵達は、怪物の腕の間合いの外まで退く。

グアーッ。

取り囲む傭兵達を無視して、怪物はまたしてもアンバーに襲いかかってきた。

こいつ、矢っ張りモーガンなのか？さっきからアンバーばかり狙ってる。化け物になってもまだ、食堂での一件を根に持ってるのかな？

シャッ。

アンバーの長剣が怪物の腕を浅くかすめた。致命打を与えるこ

とは諦めて、まずは少しでも攻撃力を削ぐことに目標を切り替えたらしい。

シュツ、シュパツ。

次々と小さな傷を負わせていく。というか、本当は小手を切り落とすつもりで斬りかかっているんだろうけど。怪物の腕の皮が厚すぎて、ポタ、ポタツと血が滴り落ちる程度に浅くしか切れないんだ。

ガシツ。

怪物はアンバールの長剣をつかんだ。白刃取りなんてもんじゃない、刃が手の平に食い込んでるけどお構いなしだ。

もぎ取られるっ！？と思った時、傭兵隊長ゴーシェの槍が怪物の手首を突き、アンバールは長剣を引き戻すことが出来た。

ゴーシェとアンバールはちらっと視線を交わすと、何年来の仲間だ、つてぐらい息の合った連係攻撃を怪物に畳み掛ける。

あらら……、オレの立場って一体……。

まあ、ね。相棒組んだっていつても、情報収集の足しになるかってだけで、どーせ戦闘の役には立ちませんよ。

歴戦の傭兵達でさえ、援護するどころか、二人の足手まといにならないように遠巻きに見守ってるほどのレベルなんだもの。”やせっぽちのチビスケ”には出る幕なし！ふうんだ。

腕利きの二人に攻めまくられて、怪物は防戦一方に回っている。遂にゴーシェの槍の穂先が、怪物の顎の下、比較的肉の薄い所に迫った。

今度こそやったかっ？……、

ガキンッ！

「！：！」

……、いや！怪物はなんと、歯でガッチリとゴーシェの槍を噛んで食い止めた！！

押しても引いても、槍が動かない。怪物は槍をつかんでブンツとゴーシェを振り払おうとする。ゴーシェは踏み止まった、つもりが、足元の石畳が凹んでいて滑り、地面に叩き付けられた。と思ったら

――、
ベシヤッ。

まるで、蚊でも叩き潰すみたいに。怪物はゴーシェの頭をあっさり打ち砕いた。

一瞬の出来事だった。

しん、と時が凍り付いたような短い沈黙のあと――、

「ひいっ！」

「うわあぁっ！！」

隊長を失った傭兵達はてんでバラバラに、我先に逃げ散る。

怪物は血に染まった手を拳に握り、ニタアッと不気味に笑った。

オレは、胃袋がきゅうつと縮んで、ガタガタと体が震えるのを感じた。

ちよつと、待てよ……。どこまでとんでもないんだよ、こいつ……。こんな化け物と、どうやって戦えって！？

1－〔8〕 秘策あり！？

あーあ、都会は人情が薄いねえ。今のオレ達、完全に捨て駒状態。傭兵達は、広場から離れた通りの向こうで待機している。広場を囲む家々の住人達は、とっくに目覚めて窓の雨戸の陰で固唾を飲んでるだろう。けど、石一つ投げるでなし、警備隊に報せに行くでなし。

そりゃさ、手練れの傭兵隊長さんを平手一発で葬り去る奴だもの、誰だってうっかり注意を引いてぶち殺されたくはないよな。でも、他人事じゃないんだぜ。アンバールがやられちゃったら、奴が次にどこに行くかわかんないんだぜ？

ズシンッ。ドシンッ。

怪物は地響きを立てて、アンバールを追い回す。アンバールは着実に怪物に傷を負わせているけど、このままのペースじゃ、怪物が失血で動けなくなるより、アンバールのスタミナが切れる方が早いよ。

アンバールは怪物の攻撃をよくかわし続けてる。でもさっき、鋭い爪で太腿に切り傷を負ってしまった。黒いズボンなんで見えづらいいけど、じわじわ血が流れ続けてるみたいだ。

脚の怪我はスピードが落ちる元になる。いずれ、つかまる……。

くそっ、どうする？ 何か……あいつの弱点は……、

そうか！

オレは傭兵隊の誰かが落としていった自動弓を拾った。大人の男なら腕の力だけで弦を引き絞れる簡便なタイプ、のはずなんだけど、オレには硬い。座って足で銃身を押さえ、両手でうんしょと弦を引き上げた。

手許にある矢は一本きり。心臓がバクバク早鐘を打ってる。けど、手の震えを静めて慎重に的を狙い定めた。ムキムキ筋肉の鎧に覆われていない無防備な所、それは……目！

ドシュッ。

やったっ、ドンピシャ！

ギャオーッ、と苦痛に叫んだ怪物は、目玉の刺さった矢を引き抜いて投げ捨てると、残った片方だけの目を怒りにギラギラ燃やして、こっちに向かってきた。

わっ、わっ、来るなーっ！

オレは、どうせ二の矢のない自動弓を怪物に投げつけた。これは、ベシッと払い落とされた。そこにアンボールが割って入り、再び怪物の目がそっちを追う。と見るや、オレは民家の脇に積まれていた壺を怪物の足元に転がした。

つるん、ドデンッ。

すっ転んで、起き上がった怪物は、小うるさいオレから片付けようと決めたらしい。本腰を入れて攻撃してくる。ひーっ、だから、オレは主戦力にはならないってのに！

「引き付けてくれ！上に！」

アンボールが叫んだ。何だか知らないけど、了解っ！

オレは商店の壁に立てかけてある梯子を駆け登り、常夜灯を取って怪物に投げつけた。

ガチャンッ。

ランプが割れて、油が怪物の頭にかかる。

しまったあっ！さっき水をかけちゃったから、火は燃え移らない。でもとりあえず、油が目に入って、目くらましにはなった。

オレは吊り看板に飛び移りながら、梯子を蹴って怪物の方に倒した。怪物はバシッと梯子を受け止め、両手に持ってぶん回してくる。うあっと、かえって敵を利したかっ！？

急いで二階のベランダの手すりに登り、吊り下がっていた植木鉢を二つ三つ投げつける。ブンッ、と梯子が振り下ろされ、木製の手すりが折れた。

すんでの所で、隣のベランダに飛び移る。怪物がもう一度梯子を振り回すと、今度は梯子の方が折れた。

ガシャンッ。

壊れた梯子を投げつけてきたのをかわすと、グシャツと窓の雨戸に突き刺さった。家の住人が中で悲鳴を上げる。

アンバールが斬りかかって怪物の気を逸らせてくれた隙に、洗濯物ロープを伝って隣の家の屋上へ、そこから更に隣の家の屋根へ。怪物が飛び上がった屋根の端にぶら下がると、瓦がザラザラッと雪崩を起こしてオレの足元をすくった。

危うくバランスを取って、広場の一角に根を下ろしている木の枝に飛び移る。怪物がボキッと枝を折り取ったので、反対側の枝へ。

……、しまった！！建物側の枝を折られちゃったから、これ以上逃げ場がないっ！！

バキッ。

立っていた枝をへし折られ、オレはもう一本上の枝に飛びついてぶら下がった。枝が大きくしなう。いくらオレが身軽とはいえ、体重を支えてくれそうな枝は、ギリギリこのもう一本上が最後ってところ。

アンバール、早くしてくれよっ！

怪物はオレを見上げてグフと笑い、上に伸び上がって両手でオレを叩き潰そうとする。

それが、アンバールが待っていた勝機^{とき}だった。

始終前傾姿勢だった怪物の upper body が起き、両腕と首が高く上向いたところで――、

アンバールはダッと一気に怪物の懷に飛び込み、長剣を低く振り下ろす。

スパンッ！

鮮やかに、怪物の短足の間で見苦しくブラブラしていたモノを斬り落とした。

……なるへそ。確かにソコも、目と並んで無防備な急所だったわな。

グギヤアーツ！！

怪物は絶叫して前屈みに倒れ込む、その大きく開いた口の中目がけて、アンバーは思い切り長剣を突き上げた。

「タアアッ！」

ズシャッ！

長剣の切っ先が、怪物の首の後ろへ突き抜けた。

怪物はまずガクツと膝をつき、それからズウンツと地面を震わせて仰向けに倒れた。

よっっし、一丁上がり！お見事っ！！

オレは木の幹にもたれかかり、肩で荒い息を吐きながら、ピツと親指を立ててアンバーに挨拶を送った。

「やったね。すげーじゃん」

アンバーも親指を立てて見せた。

「お前さんも、流石だな。逃げ足だけは特級品だ」

……、……。

「お前なーっ、もうちょっと他に言いようってもんはないのか？」

アンバーは、くくくつと笑いを噛み殺している。

あーもう、勝った途端にこれかよ。誉めて損した。

「う……うう……」

広場の片隅で呻き声をする。さっき怪物が石壁に叩き付けた傭兵さんだ。

「おーい、大丈夫か？」

オレは木から降りてのこの近付く、と――。

「動くな、チビスケッ！」

アンバーの切迫した声が飛んだ。

凄まじい殺気を感じて振り向く、と、怪物の手刀がもう目前に迫っていた。

避ける暇が無い！！！！

こんな所で死ぬのかよ……、あっけないな……。死ぬ時って、すごく痛いのかな……？

頭の中だけは妙に冴え冴えと猛回転して、十三年間の短い人生が

走馬燈のように……、

ドンッ！

寸前、オレは体当たりで弾き飛ばされた。横様に倒れながら見たものは……、怪物の爪に胸と脇腹を切り裂かれるアンバール！

怪物は口の中にアンバールの剣を生やしたまま、グフフツと満足げに笑う。

アンバールは歯を食いしばってゴーシェの槍を拾い上げると、渾身の力を込めて、怪物の残るもう一方の目から脳天を刺し貫いた。

ビクビクツと手足を痙攣させたのを最後に、怪物は今度こそ、長々と地面に伸びて動かなくなった。

それを見届けると、アンバールの体がぐらっと傾いて、後ろに倒れる。

オレはアンバールを抱き止めた——つもりだったんだけど。アンバールの体重はオレの倍以上あるだろう。支えきれなくて、よろよろっと尻餅をついてしまった。

しっかりしろ……とは、とても言えない。

肋骨が折れて肺に刺さり、大穴を開けている。アンバールは横を向いて、すごい量の血を吐いた。生温かい血がオレの膝を濡らして流れ落ち、みるみる石畳の上に血溜まりを作る。

オレが……不用心だったから……。

負傷者の収容なんて、化け物が完全にくたばったのを確認してからで良かったんだ。傭兵さんの怪我は、命に関わるほどの深手じゃなかった。傭兵仲間達がすぐに戻ってこなかったのも、冷たいんじやなくて、それを心得ていたからだったのに……。

「ごめん。アンバール、ごめん……！」

何とか声を絞り出してそれだけ言うと、あとはもう喉が詰まってしまつて、オレはアンバールの頭をぎゅっと抱え込んだ。そうしたからって、アンバールの命が血と一緒に流れ出ていっちゃうのを、引き止められるわけじゃないけど……。

アンバールはズボンのポケットを探って、金のペンダントを引っ

張り出した。オレの手に握らせて、その上からポンポンと軽く叩く。一人でもちゃんと元の時代に帰る方法を見つけろよ、とか何とか言いたいんだと思う。

そりゃ……、相棒になって、まだ半日も経ってないけど……。どっちかっていうと、気に食わない、お近付きになりたくない奴だったけど……。だけど……！

「やだっ……、オレ、やだよ、こんな……！オレのせいで命を落とす奴なんて、もう見たくない……っ、見たくないんだよーっ！！」

オレはアンバールのペンダントを握り締めて叫んだ。……、するど。

パアツと手の中が暖かく、明るくなった。涙でかすんだ目には、初め、ペンダントが光っているように見えた。でも違う。ペンダントを持ってない方の手もぼんやりと光っている。

何これ？

何が起こってるのかはわかんないけど、何をすればいいかは直感的にわかる。オレはそうっと、でも素早くアンバールの体を膝から下ろし、大怪我をしている側の横に座り直して、傷口に両手をかざした。

お願いだ、治ってくれっ……。

淡い光と一緒に、地面に流れ出ていた血がすうっと吸い込まれ、傷口がどんどん元通りに塞がってゆく。

うわっ、すげえ……まるで魔法みたい！……っっていうか、魔法だよね、これ？

あっという間に、アンバールの横っ腹に開いていた傷は、跡形もなく綺麗に消えた。

「チビスケ。お前さん……？」

あ。もうしゃべれるんだ。

安心したら、疲労感がドツと血管に流し込まれたみたいに体中に広がって、今度はオレの方がふらーっとアンバールの上に倒れ込ん

でしまった。

「おい、チビスケ！しっかりしろ。おい、エメルダ。エメルダ……！」

アンバールの呼ぶ声が遠くなっていく。あー、今夜二度目だよ……。ムツチャクチャな一日だったな……。

1-〔9〕 月光神殿

遠くから聞こえる、鐘の音とお祈りの合唱で、オレは目を覚ました。

白い天井に、金色の朝日の照り返しが眩しい。朝の※太陽の刻（※午前六時頃）みたいだ。

首だけ曲げて横を見ると、アンバールが腕組みして椅子にもたれ、うとうとと居眠りしている。ほっぺたに、ぽっぽつと髭が伸びていた。

「アンバール……」

呼び掛けると、パツと目を開けた。

「気が付いたか」

「体は、もう何ともないのか？」

「ああ。お前さんのおかげでな」

「……オレの？」

オレはベッドに横になったまま、周りを見渡した。

「ここは……」

「月光神殿の宿坊だ。ぶっ倒れたお前さんを神殿の施療院に担ぎ込んだんだが、魔法の使いすぎで疲れただけで、休ませてやれば充分だという診断でな。起きたら一応栄養剤を飲ませてやれ、と言われた」

施療院……、診断……っ！

オレは焦って、胸元を探った。服をいじった形跡はない。

「安心しろ。医者に診てもらう前に、こいつは隠しておいた」

アンバールは上着の内ポケットから金のペンダントを出して、オレの手に返しながら、廊下に漏れないように小声で言った。

「バルトー公子カシトリン姫の持ち物のはずなんだからな。見つければ厄介なことになる。そのぐらいは、抜かりない」

……、ふう。オレは安堵の溜め息を吐いた。

「あ、そうだ。怪我をした傭兵さんは？」

アンバールの目がちよつと笑った。

「大丈夫だ。一緒に治療院に来て、治療を受けた。打ち身の手当てだけで、もう仲間と宿に戻ってるぞ」

「えーと、じゃあ……ゴシエは？」

アンバールの顔が曇る。

「いくら魔法でも、一度完全に死んじまった奴を生き返らせることは出来んらしい」

「……そうなんだ……」

オレは目を瞑った。

アンバールはオレの背中の下に手を入れて、ぐいっと起き上がらせた。

「随分と人が好いな、チビスケ。よく今まで盗っ人稼業が務まってきたものだ。自分の面倒も見きれんくせに」

誉めてるんだか、けなしてるんだかわかんないことを言って、薬の小瓶の栓を抜いた。枕元の水差しから冷たいハーブティーを一杯コップに注ぎ、小瓶の中身を一たらし溶かして、オレの手に押し付ける。

ちよつと青臭い、清々しい香りがする。苦いのかと思ったら、結構甘い。薬用シロップだったんだ。

一息に飲み干したオレは、空のコップに視線を落として、ぶっくらぼうに言った。

「悪かったよ。危うくお前を犬死にさせるところだった。もうヘマはしない」

オレが素直に謝るとは、意外だったのかもしれない。アンバールも決まり悪そうに視線を逸らした。

「お前さんの身代わりになる気なんぞはさらさら無かったぞ。充分かわせるつもりが、目測を誤ったんだ。あれは俺の失態だ。忘れる」

オレはニヤニヤ笑った。

「ふうーん？ 一生覚えといてやるよ」

するとアンバールは不機嫌そうにそっぽを向いて、くしゃくしゃと前髪を掻いた。

照れてんのかな？ 可愛いところあるじゃん。

人をからかうのって、楽しいもんだね。アンバールの目に普段オレがどんな風に映ってるか、わかった感じがする。

……何だか、今初めて、こいつとはいいコンビになれそうな気がする。してきたぞ。

「アンバール、あのさ……、」

「うん？」

「一緒に元の時代に戻れるまで、死ぬなよな」

「チビスケ。お前さん……、」

いつになく気遣わしげに、優しくオレのおでこに手を置くアンバール。

「……、熱でもあるのか？」

オレは、ひつつかんだ枕で、アンバールの顔を思い切りぶん殴った。

第2章 タイガーアイ要塞 「1」 神殿でアルバイト

「大気に満ちる命の息吹よ、我が手に集いて光となれ……、”光癒”！」

オレは呪文を唱えて、お百姓のじいちゃんの怪我の上に両手をかざした。

左肩から二の腕、背中まで、ざっくりと肉が裂けて骨まで見えていた痛々しい傷がふさがってゆき……、残念。皮まできれいに治るところまではいかなかった。

でも、ずっと苦痛にしかめていたじいちゃんの顔付きは穏やかになった。

「ああ、大分楽になったよ。ありがとうさん」

只今、オレは魔法の練習を兼ねて、月光神殿の施療院でアルバイト中。

「今日は魔法治療はここまでにしておきましょう。もう二、三日ここに泊まって、ゆっくり体を治して行って下さい。エメルダ君、新しい包帯を巻いて差し上げて」

「はい」

神官のお医者先生は、飲み薬を調合し始めた。

アルバイトっていうか、本当はボランティアなんだけどね。

ここ十日ぐらい、アンバールとオレは月光神殿の宿坊に泊めてもらってるんだ。神殿の宿坊ってのは、なにがしかのお布施か労働奉仕——掃除とか水汲み薪割りとか——をすれば、参拝者に限らず、誰でも泊まれる。街中の宿より安上がりだから、体力だけはある若い貧乏旅行者とかがよく利用してるんだ。

古銭の手持ちが少ないオレ達にとって、宿代メシ代の心配をしなくていいのは有難い。しかも、オレの働きがいいんで、アンバールはおまけで労働奉仕を免除されてて、昼間は王立図書館での調べ物に専念出来る。

オレはオレで、得意の聞き耳を立てて、施療院の患者さん達の噂話なんかを聞き集めてる。昼休みの時間と、夜寝る前に、二人でその日に収集した情報を交換するんだ。

「先生、そのう、何とか今日中に村に戻れるぐらいに治してもらうつちゅうことは出来ねえべか。牛の世話があるで……」

「一度の術で治るところまでが、神様が丁度良いとお決めになった自然なお恵みですよ。それ以上は体に無理がかかってしまいます。

さっき、付き添いでいらしたお嫁さんが、農場のことは自分たち夫婦に任せて、おじいちゃんには充分体を休めてほしいとおっしゃってましたよ。おじいちゃんにまで何かあったら、他のお孫さん達が心配するから、と……」

魔法の効果は、かける側かけられる側それぞれの魔力・体力、それに場所や時間帯によっても、まちまちなんで。これには、魔法の”属性”も影響してる。

例えば、オレが使える魔法の属性は”風”。風通しのいい屋外の原っぱとか、風の吹きやすい朝夕の気温の変わり目、春・秋の大風の季節なんかだと効果が強くなるらしい。

良い条件が重なれば、普段の二、三倍の効果が出ることもあるそうだけど……、それでも、オレが初めて魔法を使った時みたいに、致命傷が一回で完璧に治るなんてことは珍しいらしい。あの時はオレも必死だったし、アンバールの方も体力・魔力は人一倍あったってことだろうな。

「……んだなあ。オラまで魔物になっちまうわけにいかねえもんなあ」

「いや、そういう意味ではありませんよ。傷口は聖水できれいに清めました。あとはきちんとお薬を飲んで、月の女神様にお祈りしていれば、貴方まで魔物になる心配はありません」

施療院で働くうちに、ムキムキ巨人と戦うオレ達に街の人達が加勢しなかった理由がわかった。

動物や人間が何故、どういう時に魔獣に変身してしまうのか、誰

にも詳しいことがわかっていないんだ。それで、伝染病みたいに、魔獣に怪我を負わされたり、怪我を負わされた人と接触したりすると魔獣になるんじゃないか……と恐れられているんだ。

この俗説は、あながち迷信とも言い切れない。実際、ビーストハンター——魔獣退治専門の賞金稼ぎ——や、怪我人を治療する神官さん達は、魔獣になる確率が一般人よりも格段に高いっていうんだから。

「だども、先生。お祈りっちゅうことじゃ、オラっちの村の神官様ほど親切で信心深えお人は、見たことがねえだよ。その神官様でさえ魔物になっちまうんじゃ、オラなぞは……」

じいちゃんは涙ぐんだ。

「ああ……。孫は、丁度あんたさんぐらいの年であ。神官様が好きで、百姓の息子に学問なぞいらねえと叱っても、しょっちゅうお堂に行っちゃあ読み書きやらお祈りの歌やら教わってきてなあ。優しい……オラよりもよっぽど、神様のご加護があってええはずの子だったに……。どうして……。こんなことになっちまったべか……」

じいちゃんのお孫さんは、魔獣になって村の人達や家畜を襲い始めた神官様を止めようとして、真っ先に殺されてしまったんだって。オレは、包帯を巻き終えたじいちゃんの背中をそうつとさすった。「大丈夫。じいちゃんは魔物にはならないよ。お孫さんが守ってくれる」

本物の神官だったら、こんな根拠のない気休めは言わないだろうな。でもオレ、本当はドロボーだもん。じいちゃんが元氣出してくれるなら、嘘だつてつくよ。

「ああ、ああ……。あんたさんもええ子だなあ」

じいちゃんは、チーンと手拭いで鼻をかんだ。

「偉いもんだ。自分もいつ魔物になっちまうかわからねえに、こうして他人様のために神殿で働いて……」

先生が笑った。

「私はもう三十年も、施療院で仕事していますよ。魔獣に襲われた

人達もたくさん手当てしてきました。そうそう簡単に魔獣になったりはしません」

じいちゃんに菓の包みを渡し、ぽんぽん、と肩を叩く。

「毎食後と寝る前に一包ずつ飲んで下さい。明日の朝の分まで出しておきます。明日の午前中にまたお会いしましょう。でも、もしどこか具合が悪くなったら、それより前でもすぐに神官の誰かに声を掛けて下さいね。では、お大事に」

オレはじいちゃんに手を貸して、診察室の外で待っていたお嫁さんのところまで送った。

「お大事に」

「ああ、ありがとさん」

じいちゃんは、しわしわのあったかい手でオレの手を握り、もう一度お礼を言った。

……、何か、ジンとくるなあ。

父ちゃんの盗賊団が解散して一人で暮らすようになってから、誰かに『ありがとう』なんて言われたこと、ほとんどなかったもん。

診察室に戻ったオレは、先生に謝った。

「すみません。勝手に適当なこと言っちゃって」

「いえ、いえ……エメルダ君、きみ、本気でここに残って神官になるつもりはありませんか？素質はあると思うんですけどねえ」

オレは首を横に振った。

「ありがとうございます。でも……、」

「お兄さんと一緒に旅を続けますか。うん、それもいいでしょう。」

お兄さんにはきみの力が必要でしょうからね」

先生が頷いた時、※昼の月の刻の始まり（※午前十一時頃）を告げる鐘が鳴った。

診察は一旦お終い。神官や見習い神官さん達はこれからお祈りの時間だけど、オレは見習いですらないただの手伝いだから、一足先に昼休みだ。

「じゃ、オレはいつものように、外で兄貴と食べてきます」

「そうですか……。勉強熱心なのは感心なことですが、たまには、お兄さんの方がこちらに戻ってきて、一緒にお昼御飯を食べるのはいかがですかねえ。あれこれと、旅の珍しい話など聞かせてもらえると嬉しいのですがねえ」

またまたアンバーの口から出任せで、オレ達は、魔獣退治なんかしながら行方不明の両親を捜して旅をしてる兄弟、とかいう設定になっている。

でも、ボロが出るとまずいから、あんまり余計なお喋りは出来ないんだ。

「すみません」

「ああ、いえ、気にしないで下さい。お兄さんの気持ちはよくわかりますよ。王立図書館は知識の宝庫ですからねえ。私も田舎から出て来たばかりの頃は、食事も忘れて読みふけりましたよ。いやあ、懐かしいなあ……」

一人合点して回想に浸る、気のいい先生。ごめんね。

オレは、アンバーの分まで持っていく昼食をもらいに、食堂に向かった。

第2章 タイガーアイ要塞 「1」 神殿でアルバイト（後書き）

わー！いつの間にかお気に入り登録が入っていることに気付かず、久しく更新していませんでした。すみません！有難うございます！！
出産までに、物語の大きな流れが見えてくる2章終わりまでは少なくとも仕上げたいと思っています。時間が足りないようだと矢張り、小説FFT優先になってしまいますが……。

2-〔2〕 風の市の日

「おばちゃん、籠借りるね」

オレはいつものように、藤編みのバスケットを取った。

「ああ、お兄さんの分もいっぱい持っておいき」

まかないのおばちゃんが、陽気な声で答えてくれた。

食堂の大皿や籠に山と積まれたパンやチーズ、ふかし芋、果物なんかを、オレはせっせと籠に詰める。

アンバーはオレの三倍は食うもんな。結構、大荷物になる。

うーん、焼きたてパンのいい匂い！全粒粉とか雑穀入りじゃない、ふわふわの白パンだ。卵とバターをたっぷり使ってて、甘いんだよね。

オレは最初、たまたま祭日なのか、この神殿がよっぽど裕福なのかと思ったけど、この時代のギヤマニア王国では毎日普通に食べるみたい。

野菜や果物も、大きく太っていて甘味が強い。魔法で品種改良されて、荒れ地でも作物がよく育つんだって。こんなに美味しいのに虫喰いが少ないのも、矢張り魔法なのかな？

大きな樽から、葡萄酒も水筒に移す。オレ用に甘口のと、アンバーの分には辛口のと。

オレは葡萄酒の味なんてよくわからないけど、変な酸味や渋味がなくて、上等なんじゃないかな。

親父に飲ませてやったら喜んだろうなあ……。ギヤマニア育ちのオレは麦酒ビールにも慣れてるけど、コランダム人にはどうしても、葡萄酒が懐かしいらしい。

さて、籠がいっぱいになったら、上にナプキンをのつけて、一丁上がり。

いってきまーす！

本当は、見習い神官の法衣は汚さないように脱いでいった方がいいのかもしれない。

でもさ、この格好だと、全然見ず知らずの人でも、敬意と親しみを持ってくれる。

トレジャーハンターなんて後ろ指差される稼業で生きてきたオレには、快感なんだよなー。役得、役得。

こうして神殿の廊下を歩いている間にも、参拝客のじっちゃんばあちゃんや子供達が、笑って挨拶してくれる。嬉しいね。オレもつい、ニコニコ。

……ああ、今日は人が多いな。風の市の日だから。

王都シャンデリアでは、週に一度、風曜日には盛大な露店市が立つ。ちよつと遠くの村や町からも、大勢の人が集まって来るんだ。

門を出ると……ほら！沿道を埋め尽くす店、店、店。活気のある、売り子の呼び声。

中央広場を起点にして、東の太陽神殿と、西の月光神殿に向かう参道が、一番賑やかなんじゃないかな。門前市ってやつだね。

市場の喧騒の中に入ると、本当に豊かな時代なんだなあって実感できる。

どの店にも商品が山盛りで、お客達もそれをじゃんじゃん買っていく。

流石は魔法時代、こういう保存技術なんだか、春先なのに秋の野菜が瑞々しいまま出回ってる。

でも、西瓜やトマトまであるのは、去年の夏から保存してたのじゃない。畑の周りだけ温かくする魔法とかで促成栽培してるらしい。すっげえ話だな。

まあ、簡単な技術じゃないんだろう。他の物の値段から推測すると、本来の季節の三倍ぐらいの値が付いてるんじゃないだろうか。それでも、結構売れてる。

海から遠いはずなのに、お魚も新鮮だ。

籠からこぼれた小魚を野良猫がかすめていったけど、店のばあち

やんはちらつとうるさそうに一睨みしただけで、怒鳴ったり追いかけてりはしなかった。

ほえー、太っ腹。……っていうか、これだけの人混みだと、泥棒猫よりも人間の万引きの方を警戒しなくちゃならないか。

色とりどりの飴細工に、串焼き肉……あー、美味しそう。神殿の食事は量も質も申し分ないけど、無用の贅沢はしていない。甘味物とか肉類とかは、祭日だけ特別に出るらしい。

でも、お財布は持って来てないんだ。”見習い神官”が買い食いなんかしちゃいけないよね。これだけが、神官服を着てる時の不便なんだけど……ま、いいや。たまにはアンバーに、帰りに何か買ってきてもらおうかな。

……っと、お腹が空いてると、つい食べ物のお店ばかりに目がいつてしまう。

他のお店も様々だ。木彫り細工や、陶器、金物のお店。外国の珍しい香料やスパイス、織物なんかを売ってる店もある。

古着屋さん。古着っていつでも、ほとんど袖を通してなさそうな、新品同様の服もかなりある。オレ達が生まれた三百年後の時代だともっと擦り切れたりツギが当たったり、二、三着の服から使える所だけ接ぎ合わせたようなのが平気で並んでるものだけど。どっかの行き倒れの旅人とか、疫病で死んだ人から？いできたんじゃないか？って、イヤ々な匂いの染みついてるやつも混じってたり……。

物以外のサービスも多種多様。曲芸師に手品師、辻楽師。マッサージ師。占い屋さんもある。

因みに、完全な予知の魔法ってのは無いらしい。だからあれば、気休めのための人生相談みたいなものだね。

魔獣にならない護符だの薬だのを売ってる奴がいるけど、あれも”イワシの頭”の類。そんなもん、本当に効くんだったらとつくに神殿で売り出してるよー。

おや、あっちは魔道具じゃなくて、普通のアクセサリ屋さんか。宝石・貴金属じゃない、ガラスや貝殻や木のビーズで出来た腕輪と

か髪飾りとかを売ってる。町の娘さん達がきゃいきゃいお喋りしながら品定めしてて、なかなか盛況だ。

ふうん……、綺麗……。

と、つい見とれていたら。

「おおっと」

オレは、籠に手をつ突っ込んだ男の子の手首を取り押さえた。

”同業”なもんでね。勘が働くんだよ。

「もっと腕を磨きなよ」

ちょこっと笑いかけてオレは、しっかりとパンを掴んだままの男の子の手を、パツと放してやった。

「捕まんないよーになっ」

男の子は一瞬、鼻の頭に皺を寄せると、くるっと背を向けて走り去る。穴の空いた革靴を履いているのが見えた。

いいね。オレ達の時代だと、ああいう（多分）路上暮らしの子は……いや、親も家もある下町の子だって、冬でも裸足のことが多いよ。

道端をうろつく野良犬、野良猫さえ、何だかぼってりして毛艶がいい。

結構な時代だよ、まったく。羨ましい限りだぜ。

……魔獣化の恐怖さえ無ければ。

中央広場の一角で、悲鳴と怒声が上がった。

「何だ？」

「どうした、どうした！」

「荷馬車の馬が、魔獣になっちゃったらしい！」

ワツと広場から逃げ出して来る人達と、逆に物見高く広場に向かおうとする野次馬達とがぶつかり合って、通りは大混乱になった。

「ちよっと、どいてっ……通して！」

オレは人の波をかき分け、広場に近付こうとする。

野次馬じゃないぜ。といって、間違っても、魔獣と戦うつもりは

ないけど。今のオレは丸腰だし、攻撃魔法なんてもんは教わってない。

ハッキリ言って、この時代に来て最初の晩にムキムキ巨人と戦って以来、魔獣と関わり合いになるのは二度と御免だと思ってる。だけれど折角、治癒の魔法を覚えたんだもの。怪我人がいたら、助けなきゃ。

「通してってば！」

お、矢張り神官服が効く。みんな——小っこいオレに目を止める余裕のあった人はみんな——道を空けてくれる。

それでも人の波に流されつつ、流れに逆らいつつ、何とか広場に辿り着いた。

騒ぎはもう、鎮まり始めている。居合わせた市の警備隊員や、魔獣退治屋達「ストハンター」が、魔獣化した馬をすぐに仕留めたいらしい。

露店市の人達が、散乱した野菜や壺を片付けたり、かっぱらいがそれをこっそりネコババしたりしている。

「大丈夫？ 怪我した人、いない？」

「あ、神官さん！ 診てやってくれ」

魔獣に噛み付かれたらしい人が、呻いていた。馬だったはずなのに、狼みたいな鋭く尖った牙の跡が付いている。うう、見るからに痛そー……。

近くに水汲み場があったんで、傷口を洗って治癒魔法をかける。

「おーい、こっちも頼む」

お次は、骨折か。この人は、蹴飛ばされたんだな。

「ちよっと痛むよ。……いよっと！」

折れた腕の骨をはめ直し、手近にあった薪と手拭いで添え木をする。

「後は、神殿でちゃんと診てもらって」

親父の盗賊団にいた頃に、応急手当てとか、包帯や三角巾の巻き方とか、実地で覚えたから。手慣れたもんだ。ま、おかげで施療院の助手なんてやらせてもらってるわけ。

「有難う」

あ、またお礼言われた。うーん、いい響きだ！一人で盗っ人稼業なんかしてると、有り難がられる機会なんてないもんねえ。

他は――と見ると、打ち身や擦り傷程度の軽傷の人だけ。

それと……、残念ながら、明らかにお亡くなりなのが三人。無惨な傷跡を見せないように、周りの人達が急いで大きな布を掛けている。

二頭立ての荷馬車の、もう一頭の挽き馬も、噛み殺されてしまったらしい。可哀想に……。

と、見ていたら。

強い風が吹き下ろして、広場に大きな影が差した。野次馬達が場所を空ける。

上空をパトロール中の、王宮の竜騎士が降りてきたんだ。

元は馬だった、奇っ怪な化け物の死体を検分する横で、乗ってきた魔竜が涎を垂らしている。調べが済んだら、エサにされるらしい。待ちきれなかったのか、死んだもう一頭の馬を食べ始めてしまった。うげ！骨ごと、バリバリ丸かじりにしてるよ……。

飛竜って、本当は草食性のはずだけど。竜騎兵隊の竜は軍事用に、人工的に魔獣化してあって、獰猛なんだ。魔力を込めた首輪の効力で、人の言うことに従ってる。でも戦闘中とかにうっかりこの首輪が壊れたら、そりゃーもう敵味方関係なしに暴れ回るらしい。

そんな危ねーもん作るなよ……。

ってか、意図的に魔獣化出来るってことは、王宮は魔獣化の仕組みを知ってるってことか？きつと、特級の軍事機密に違いないけど。魔獣化の謎を知り得ない庶民は不安に駆られて、怪しげな護符にすがったりもする……。

おっとっと。ポケットとしてる場合じゃない。

オレとアンバールも、最初の日にお城の前から逃げてきた身なんだけ。ひよっとしたら、不審人物として手配されてるかもしれない。

竜騎士さんがこっちに事情聴取に来る前に、行こっと。

……大分、時間食っちゃった。ちょっと急ごう。

オレは早足で、広場から南の、王立図書館に向かう。

王城がシャンデリア市の南にあるんで、街の南の方が武家屋敷やら豪商の邸宅やらの並ぶ高級住宅地になっている。

バカでっかい門をくぐり、だだっ広い公園の中を小走りでつつき
ってゆくと……、ああ良かった。間に合った。

すぐに見つかったよ。あいつ、遠くからでも目立つなー。

大剣を背負った、長身、黒ずくめの服のアンバーが、丁度図書館の玄関を出て階段を下りてくるところだった。

2—〔3〕"乗りかかられた船";

「よっ、お待たせ！」

オレはアンバールに手を振った。

「ああ……別に」

アンバールは無愛想に答えて、両眼のこめかみのツボを指で押した。今日も相当、根詰めて調べてみたいだな。お疲れさん。

図書館の前庭は広い公園になっていて、ぽかぽか日当たりのいい芝生とか、噴水や花壇の横のベンチとか、気持ちの良いお弁当スポットがいっぱいある。

でもオレ達が向かうのは、人気無い、ひっそりと静かな北側の裏庭だ。

静か——といっても、恋人同士が逢い引きするような、落ち着いた、ロマンティックな風情のある静けさじゃない。言っちゃ何だが、痴漢が女の子を引っ張り込んだりとか、強盗殺人犯が死体を棄てたりとかしても誰も気付かないんじゃないかっていう、昼なお薄暗い、不気味な感じのさびれ方をしてる。

ま、トレジャーハンティング——要するに盗掘なんつう後ろ暗い稼業で生きてる、オレ達みたいな不健全な青少年が密談するには似合いの場所かな。

お掃除されてない、傷みかけた木の丸テーブルと椅子に積もった落ち葉を払い、腰を下ろして、オレ達は昼飯の包みを開けた。

アンバールは”いただきます”とも言わずに、黙々とパンやチーズを囓りつつ、昼間っから結構な量の葡萄酒を飲む。

仮に相棒を組んで十日余り、雑談をするほど打ち解けた間柄じゃない。アンバールが本から得た知識は、食事が終わってから図面とか出して説明してもらった方が分かり易いから、オレの方で特に報告するほどの情報がなければ、食事中の会話なんぞは無し。

親父が死んでからこの二年というものの、オレだってメシ食うのも

何するの一人っきりだったし、無駄口きかない方が気楽かな。

傍で見ると、アンバーはむしろむしゃと無造作に食ってるようにでいて、食べこぼしとかほとんどしないし、むやみに噛む音を立てたりゲップしたりしないし、一口に頬張り過ぎて戻したりとかもしないし……、なんつーか、お行儀が良いってほどきっちりマナーを守ってなくても、サマになっている。

薄々そうかなあとは思ってたんだけど、この十日ぐらいの間に、確信に変わった。

……こいつ、お武家のぼんぼんだ。それも、かなり名家（いづれい）の。

話し言葉に訛りがなくて、発音が綺麗だなあってのは、前から感じてた。でも、王都の出身なら庶民でもこんなものかと思っ
て、そんなに気に留めてなかったんだけど。

喋り方だけじゃない。日常の何気ない立ち居振る舞いが、意識してない時でもピシッと格好いい。……これは、一遍よっぽど厳しく
礼儀作法とか躰けられた人間だ。

辛口の、それも白葡萄酒なんか飲みたがるのも、上流っぽい。ギ
ヤマニアで庶民が毎日普通に飲んでるのは、麦酒（エール）だ。コランダム人
は葡萄酒好きだけど、コランダム風のは、アルコール度が低くてジ
ュースみたいに甘い赤葡萄酒だし。

そして！何より、こいつは学がありすぎる！

そりゃ、遺跡の盗掘とかやるからにゃ、歴史や古文の知識は必須
だよ。オレだって、古文は読める。けど、読めるったって、現代語
訳の辞書と首っ引きでだぞ。

辞書も無しに、一日に二十冊以上もの古文の本読んで、しかもそ
の内容がしっかり頭に入ってるって、どーゆうこと！？おかしいだ
ろ！オレ、現代語の本だってそんなスピードじゃ読めないぞ！つっ
ーか、三百年後の時代のギヤマニアじゃ、そもそも現代語の読み書
きが出来る人間だって人口の二割がせいぜいなんだぞ？

ただに古文の知識だけでなく、書かれてる内容について――ベ-

スになる歴史、地理とか、算学天文学、錬金学とかの広範な教養があるものと見た。

ついでに、こいつはオパール語の読み書きも出来るらしい。

ギヤマニア語とコランダム語、レクサンドラ語は姉妹程度に似ていて、通訳無しでもまあまあ日常会話は成立するぐらいなんだけど。オパールの草原の民の言葉は、文法も単語も文字もまるっきり別モノで、一般庶民にはちんぷんかんぷんだ。

流石にオパール語の古語まで知らん、とか言ってたけど、オパール人の商人相手に込み入った値段交渉して、ちゃっかり半額以下まで値切ったりしてる。

……と、礼儀作法と学問が身に付いてるってだけなら、豪商とか高位の神官の家の子って可能性もある。

でも、我流とは思えない武術の腕前が決め手だな。矢っ張り、お武家だろ。

国籍不祥の顔立ちからして、貴族が外国人の踊り子なんかに産ませた子かともか、思ったけど。そういう子供達はほとんど、父親に引き取られることなんてないし。

そうじゃないとすると……、外国の貴族とも縁戚関係のある、超上流貴族だったり？

ああ、でもでも、じゃあ何でそんな奴がトレジャーハンターなんかしてるんだよー。

こいつ、何か色々アンバランスだ。

トレジャーハンティングなんて、強盗とかと違って武力に訴える場面はほとんど無い。普通、得物はオレみたいに短剣やナイフぐらいで充分なはずだ。

然るに、その背中の大剣は何なわけ？ しかもよく見たら、それなりに使われてるらしい血の染みなんか付いてるし……。

こいつの腕なら、用心棒とか賞金首退治とかした方が、はるかに稼ぎはいいだろうに。まあ、傭兵だってあんまり真っ当な商売とは言いがたいけど、少なくとも官憲に捕まって縛り首になったりする心

配は要らないだろ？

更にもっと訳わからないのは……、こいつが何で”黒服”なのか
ってこと。

盗賊とか密猟者とか、大概の無法者アウトローは森の中に隠れ住んでいて、
木々に溶け込む緑や茶色の服を着ている。オレみたいだね。同業者
のことを”緑の服の兄弟”なんて呼び合うもんさ。

闇に溶ける”黒服”は、殺し屋とか、いざこざを起こして無法者
の仲間内でさえ村八分になったような……外道中の外道の印だ。

オレが知ってる他の”黒服”は、『寄らば斬る』ってな殺伐とし
た気配をぷんぷん漂わせてて、見るからにヤバげな奴ばかりだ。

”黒服”さんに話し掛けられたりとか、まして相棒組もうとか持
ちかけられるなんて、”常識”じゃ考えらんないよ。

アンバールは、愛想は無いけど、そんなに剣呑な感じはしない。

もう一つの可能性として、誰かの仇討ちを誓って喪に服してる奴
も黒服のことがあるけど……、でも、そういう場合は剣や槍にも喪
章を付けるものだ。それに、もう一種類の”黒服”と間違われると
警戒されて情報収集とかしくくなるから、逆に喪章だけ付けて服
装は普通の旅姿にしてる奴の方が多いかも。

人嫌いの一匹狼が、特に脛に傷なんか無くても、『群れるのは御
免だ』って意味で黒服を着ることもある。でも……それなら何で、
オレには話し掛けてきたのかな……。

ああ、気になる！思いつきり気になるぞ！！

だけど、興味本位で訊いていいことじゃなよー。こいつの方が
話す気になるまで待つしかないか。

ま……、詮索されると困る隠し事してるのは、オレの方もおあ
いこだし。

代わりにオレは、近頃ふつふつと沸いてきた根本的な疑問をアン
バールにぶつけてみた。

「あのさ、思ったんだけど。そもそもオレ達って、元の時代に戻

る必要あんの？」

アンバーは食べる手を止め、ちょっと眉をひそめた。

「オレ、帰ったって別に、家族とか仲間とか誰もいないし。この時代で、このまま本当に見習い神官になっちゃった方が暮らしやすいかもな、なんて……。」

お前は？ 待ってる家族とか、恋人とかいるわけ？」

……ちよつと探りを入れてみたり。

「別に……。待っている奴なぞいないさ。俺が消えて喜ぶ奴なら、山ほどいるが」

と、アンバーは苦笑する。

割と予想通りなお言葉で。……『待ってる女が星の数ほど』とかいう返事でも、驚かなかったけどね。

「が……。それはそれとして、帰る必要は大ありだ」

アンバーは葡萄酒をぐいとあおって、言った。

「今でこそ、こうして上等なタダ飯が食えるほど豊かな時代だが。歴史通りに時が進むなら、あと一年もすれば、魔法時代は終わる。魔法技術に頼っていたギヤマニアでは、農業も商工業も一気に衰退して、大混乱になる。内乱でボロボロになっている、現代のスターサフィアやブルーサフィアよりも非道い状態になるぞ」

あ……。そうだった。

「でも、じゃあ、ご先祖様達のコランダム大公国に移住しちやええ？ コランダムは逆に、これからが最盛期だろ。お前だって、一応コランダム人の血は引いてるんだよな？ 受け入れてもらえないってことはないと思うけど？」

「そうもいかんさ。最大の問題点は、ここがただの異世界や未来の世界でなく、”過去の世界”だということにある」

「……？ どーゆうこと？」

「そうだな。一番分かり易いのは……例えばだ。俺達がこの時代で、俺達の先祖に当たる人間を誰か殺せばどうなる？」

「あっ！……どうなるんだ？」

「さあな。正確なことはわからん。時を飛び越える魔法は、理論だけは研究されているが、この時代でも誰も成功したことはないらしい。俺達は、貴重な第一例目というわけだ。……王宮魔道士の連中が知れば、俺達をとっ捕まえて根掘り葉掘り調査したがるだろうよ」

アンバールの調べたところによると、時間移動の魔法には、とんでもなく厳しい条件が必要らしい。まず、火水風土、日月、六種の魔法を同時にバランス良く使うために、超一級の魔道士が少なくとも六人要る。しかも、超強力な魔力増幅装置――多分、ダイヤモンド・スピリットを七つ全部集めたぐらいの――の助けも借りて、更に地理天文、気象条件の揃った場所と時に大がかりな魔法陣を作って……とかしなくちゃならないらしい。

「諸説、あくまでも推論にすぎないんだが……、どの道、あまり面白いことにはならん」

一説によると、過去は絶対に変えることが出来ない。ご先祖を殺そうとしても、どうしても邪魔が入ったり、殺したと思ってても別人だったりして、どうやっても不可能だという。

また別の説によると、過去を変えれば当然未来も変わる。どのくらい変わるのか……、オレ達は、誰か代わりの人間の血が入った、ちょこっとだけ別の人間になるのか。あるいは、まるっきり消滅してしまうのか？

またまた別の説によると、ここは過去の世界にそっくりだけど、矢張り別の世界で、何をしててもオレ達には全く影響無いとも言うけど……。

どれが本当なんだか、敢えて実験してみたくはないわな。危険すぎる！

「殺しに限らない。例えば、他の男の嫁になるはずだった女を横取りしても、生まれてきたはずの人間が消え、生まれてこなかったはずの人間が増えることになりかねん。

何をやっても変わらない……あるいは、変えることが許されない……、そんな世界に閉じ込められるよりは、ろくでもなくても、自

力で何とか出来る余地のある世界の方がマシだ」

うーん。と、オレは唸ってしまった。

「そっかあ……。残念だな。施療院の仕事、結構気に入って始めたんだけどな。ヒトからお礼言われたり、気軽に話し掛けたりしてもらえるカタギの暮らして、やっぱいいなあって……」

と、オレは見習い神官の制服を撫でて、パン屑を払った。

そこへ――。

薄暗く茂った植え込みをわさわさき分けて、見ず知らずの兄ちゃん、息を弾ませ、倒れ込むようにしてオレの前に手を付いた。

「た……助けて下さい！追われているんです」

年の頃は、アンバーと同じくらい？

服装はオパール草原の遊牧民みたいに、ターバンみたいなつば無し帽子を被り、動きやすい乗馬服みたいなの上に、綺麗な唐草模様の刺繍の入ったベストを着ている。

だけど、オパール人じゃないな。オパール族長連合国には十以上の部族が住んでいて、それぞれ顔立ちやら服装やらに違いがあるんだけど。どの部族民にしろ、年中カラリと晴れた大空の下で羊や山羊や駱駝を飼っているから、浅黒い肌をしているんだ。

この兄ちゃんは、今は春先だからにしても、色白で全然日焼けしてない。髪は茶色、眼は深い青で……この組み合わせは、レクサンドラ人かなあ？細面で、手足がほっそりしてて、あんまり力仕事をしてる人間には見えないな。商人とか、芸人さん？

丸腰で、特に荷物も何も持ってないんで、何とも判断材料が無いんだけど……。

助けてくれて……、どうしよう？と、アンバーを見上げると。

「……。持ち金の半分でどうだ？」

「おいおいっ！？」誰に？」どうして？」追われているのか、とかより先に報酬の話かい！しかも、かなり吹っ掛けてるし！

「お金は……持っていないんです」

と、兄ちゃんは困ったように言ってから、

「あ、でも！値打ち物ということでしたら……ドラゴンの角が二つ。一本でしたら、差し上げて構いませんが」

オレは、ヒョウツと口笛を吹いた。

ドラゴンの角っていったら、高価な魔法薬の材料になる、貴重品だ。一本で数千ディラムの価値はあるだろう。

「よし、そいつで手を打とう」

いいのかよ？相手もわからないのに引き受けて……。

と思っただら、”相手”はすぐに現れた。

槍を持った兵士が三人。あの制服は……、げ！王城の警備兵じゃないか！

「何だ、お前達は？仲間か？」

「おい、大人しくそいつをこっちに渡せ。邪魔立てするなら……、」
ドカ、バキ、ズゴッ！

アンバーはあっさりと、拳や蹴りの一撃ずつで兵士達を昏倒させた。

うわ、ひつでえー……。問答無用かよ！

「おい、アンバー！どういうつもりだよ？」

「説明は後だ。すぐに、そいつを連れてこの街を出るぞ」

「えっ！？」

「俺達も、最初の日には城兵達に顔を見られている。詮議されれば厄介だ」

「あ！もしかして……あの時追われてたのって、この兄ちゃん！？」
振り返ると、兄ちゃんも気を失って倒れている。顔が真っ青だ。息が浅く速く、体が震えている。何かの病気かな？大丈夫かなあ……。

「その可能性もあるな」

アンバーは兵士達の上着を脱がせて引き裂き、その布で手早く連中の手足を縛り、猿ぐつわを噛ませながら話す。

「今日は市の日だ、人の出入りが多い。街の城門での検問は簡単

なもので済むだろう。俺達はすぐに出発すれば見咎められないだろうが、こいつは手配されていると思った方がいい。どうにかして姿を隠さなければな」

「どうにかって……変装させるとか？」

「いや……病人は神殿に連れて行けと言われるだろう。街の中に入るならともかく、出て行くには不自然だ」

「うーん……じゃあ、籠とか壺の中に入れてく？」

「人を入れれば、大きく、重くなりすぎる。目立つな。何か、もつと……旅人が持っていて違和感の無い、中を改めてみようと思わないようなもの……」

「ええっと……、テント！」

「よし、そいつだ。冴えてるな。たまには」

一言余計なアンバー。

「オレはいつだって冴えてるよ！」

アンバーは財布を放って寄越した。

「市で驢馬とテントを買ってきてくれ。足りるなら多少値は張ってもいい、どうせ後で売っ払う。あまり交渉に時間をかけるな」

「オレがそいつの側に残った方がいいんじゃない？」

「俺も応急手当の心得ぐらいはある。それより、こいつらが目を覚ませば、お前さんでは押さえきれんかもしれん」

と、アンバーは兵士達を茂みに放り込んで言った。

「わかった」

と、オレは見習い神官の上着を脱いで、立ち上がる。

あーあ、気の良い神官先生達とも、もうお別れかあ。オレって矢張り、カタギの暮らしは出来ない運命さだめなんだな……。……。

2-〔4〕 相棒の条件

謎の兄ちゃんをテントに簀巻きにして、驢馬の背中に載つけ、月光神殿に帰って大急ぎで荷物を回収して。オレ達はどうにか、怪しまれないうちに街の城門を通過した。

差し当たって、街道を南に向かう。ペンダントの暗号で、一番近いダイアモンド・スピリットの欠片は、ギヤマニア島南部のタイガーアイ砦の辺りにあるらしいとわかってるから。

そういや、この時代に来てから、シャンデリア市の外に出るのって初めてなんだ。ドキドキするなあ。

とりあえず、近郊の農村はオレ達の時代とそんなに変わらない様子だ。何かの魔法なのか、畑の四隅に石板が建ってて、その中に季節外れの野菜が生い茂ってたりするぐらいで。

時々ちらっと後ろを振り返ってみるけど、早馬や飛竜が追いかけ来たりはしない。

まだ街の中にいると思って探してるのかな。そうであってくれればいいけど……。

※半時（※一時間）ぐらい歩いて、峠を一つ越えると、人里が途切れて森に差し掛かった。

森っていうよりは、林かな？ 割と人手が入ってるみたいで、下草や倒木が少なく、明るくて見通しが良い。

……でも、やけにシーンと静かで、薄気味悪いな。春先の昼間なら、鳥や小動物がつかいを求めて鳴き交わしてて、もっと賑やかそうなものだけど？

魔獣とか、山賊とかに出くわしませんように……。

それはともかく。

周りに人の姿が無いことを確認して、オレはアンバーに尋ねた。「で？ そろそろ説明してもらってもいいか。どうして、この兄ちゃんを助けたんだ？」

「ああ……」

アンバールは事も無げに答えた。

「こいつは恐らく、外国の間諜だ。^{スパイ}恩を売れば、バルトー公子かシトリン姫につながを付けられる……とまではゆかなくとも、一般人の噂よりは詳しい情報を引き出せるかもしれないと思ってな」

……。

いきなり、理解の容量越えた。

「どこから、そーゆう話になるんだっ!？」

「じゃあ訊くが、お前さんはどうだ? 咄嗟に、こいつを助けてもいいと思ったか?」

「……えっと……。助けてやりたいけど、助けたらすげえ厄介事に巻き込まれそうな気がした……ってとこかな?」

アンバールは薄く笑った。

「その判断で、間違っていないと思うぞ。で、どうしてそう思った」

「どう……って言われても……直感で、としか」

「直感というやつは、ただの当てずっぽうとは違う。他人に上手く説明は出来なくても、自分では無意識のうちに理由や理屈を納得しているものだ。」

……順を追って考えてみる」

アンバールは、前髪をかき上げながら話す。

「まず、こいつは人気無い茂みの中なんぞを逃げてきた。その上、剣を背負った大の男よりも、見習い神官の服を着た丸腰のチビの方に助けを求めた。」

そこから、わかることは?」

「んーと……。単純に力でぶちのめすわけにはいかないけど、神殿だったら匿ってくれそうな相手から追われてる?」

アンバールは頷いた。

「そういうことだ。」

普通、” 善良な市民が悪漢に追われている ” のなら、なるべく人の多い場所に出て、強そうな奴に助けを求めるだろう。

逆に、こいつの方が悪党で、逮捕されかかっているのなら、神官にすがろうとはせんだろうしな。

つまり、”敵”が大きな権力や財力を持っていて、俗世の法では保護され難い……だが、こいつの方には道徳的にやましいところは無い。と推測出来る」

「成る程ね。それで、外国の間諜……^{スパイ}か」

ギヤマニアの占領地支配は厳しいようだから。自由独立を目指して活動する運動家達の方に、よっぽど”正義”があるかもしれない。でもギヤマニアの官憲は当然、取り締まるわな。

「条件は当てはまるけど……。そうとも限らないんじゃない？」

「まあな。例えば色恋や、やむにやまれぬ刃傷沙汰で、一般人が貴族か大店のイカレぼんちに睨まれているのかもしれない。だが、そうとは考えにくい理由が二つばかりある。

一つは……、お前さん、こいつが何者に見える」

「さあ……？ 旅の商人か、芸人さん……ってどこ？ よくわかんないよ」

「俺にも、さっぱりだ。

その辺の百姓や、町人、傭兵の類なら、もっと一目でそれとわかる格好をしている。第一、少なくともギヤマニア人には見えんな。といって、コランダム人ともレクサンドラ人とも、はっきりとはわからん。

考えられるとすれば確かに、商人か芸人か、学生かというところだが……、それにしても、商売道具のような物を何も持っていない。服や靴も新しい。使い古されていれば、汚れの種類や付き方が何かの手掛かりになるかもしれないが……。

職業や経歴を特定出来るような特徴が、なさ過ぎる。わざと隠しているのでもなければ、ここまで”のっぺらぼう”な奴も珍しいぞ。

……それで、試してみた」

「試す？」

「所持金がどのくらいあるか、どれだけ払ってもいいかで、厄介事

の程度が計れるかもしれないと思ったんだ。

間諜なら、それなりの活動資金を持っているはずだろう。案の定、こいつは一財産持っていて、しかも値切りもせずに払うと言っていた。

零細な行商人や、大道芸人に払える額じゃない。現金でなく、換金アイテムで持っている辺りがなお怪しい」

「成る程ねえ……」

オレはトコトコと付いてくる驢馬くんの背中を振り返った。

「まあ、別の事情があるのかもしれないが。そうだとすると、ドラゴンの角一本なら、かなりの報酬だ。引き受けて悪くはない」

アンバールは掻き上げた前髪を、指でばさばさと梳ってまた下ろした。

こいつ、考え事をする時に前髪をいじる癖があるみたいだ。

「あのさ、思うんだけど。その前髪、長すぎじゃねえ？」

「ん？これか」

アンバールは苦笑した。

「俺もな、常々、うっとうしいと思っている」

「……？だったら、切れよ」

わけわからんことを……。

「なあ、アンバール。もう一つ訊いていいか」

「何だ？」

「そこまで色々考えられるお前がオレと相棒組んだのも、ただ何となくとか、同情とかじゃなさそうだな。……オレの利用価値って、何？」

能力差からするとこの相棒関係って、”持ちつ持たれつ”っていうより、オレの方に一方的に得なように感じるんだけど……。

人との関わりを避ける”黒服”のはずのアンバールが、敢えて声を掛けてくるほどのどんなメリットを見出したんだろう？

「ああ」

アンバールは笑った。

「言つたろう。お前さんが思つてるよりは、俺はお前さんを買っているつもりだと。」

お前さん、俺とあちこちの遺跡で鉢合わせるのを、偶然だとも思つていたのか？」

「……運命だとかつて、気色悪イこと言うなよ」

「言うか、馬鹿」

「じゃあ何だよ」

「約束したわけでもないのに、しょっちゅう会う。それはつまり、自分と考え方や行動パターンが近い人間だということだろうが。通りすがりの奴を無作為に捕まえたよりは、はるかに意思の疎通が図り易いと期待出来る」

「あつ……」

「他の奴が目を付けない穴場を狙つたつもりなのに、五つも年下のお前さんが嗅ぎ付けて、ひよっこり現れるんだ。何度も驚かされたぞ」

へえ……。オレはただ、自分に出来ることをやってきただけなんだけど。」

「オレって、実は結構すごい？」

「まあ、常に一歩及ばんから、俺に負け続けているんだが」

……ぐう。

「しょーがないだろ！オレの方がずっと年下なんだから！」

アンバーはわしゃわしゃと、オレの頭を撫で回した。

「ああ。十三にしちゃ、大したものだ。」

実際、最初の晩に襲撃を受けた時も、落ち着いてすぐに俺の意図を汲んでくれた。

施療院で拾い集めてくる噂話もツボを心得ていて、確実な、欲しい情報をまとめてくる。俺が図書館で得た知識を教えてやっても、飲み込みが早い。

戦闘力という面では非力だが、怪我の手当てには慣れているし、今は治癒魔法も使える。

お前さんは、なかなか役に立つぞ。チビスケ」

「その、チビスケって呼ぶの、いい加減やめろよな！オレにはちゃんと、エメルダって名前があるんだぜ」

オレは、アンバールの節くれ立った手を払いのけた。

でも……、ふうん……。そっか、そっか。

ずっと一人で暮らしてきたからさ、自分の実力がどのくらいなもんだかって、わかんなかったんだよ。アンバールに連敗してるから、オレって鈍くさいのかと思ってた。

「まっ……、なら、いいんだ。本当はお荷物なんだけど、お情けで付き合ってくれてるとかいうんじゃないなら」

「俺がそんな、親切な人間に見えるか？」

「見えない」

「随分、きっぱりと言ってくれる」

「だって、お前は見え透いたおだてに乗せられるような奴じゃないだろ」

「それはそうだが……」

「オレの方だってさ。愛想や親切心なんか期待しやしないけど。お前の判断力とか、剣の腕とかは大いに信用するよ。これからよろしくな、相棒！」

オレは、アンバールが背負った大剣の鞘をポンと叩いた。

「っと……、それで、ご先祖につながるって話は、どこから出てくるんだ？」

あ。今、”誉めて損した”って顔された。

「話さなかったか。時を飛び越える魔法には、大掛かりな魔力増幅装置が要る。」

歴史では、ご先祖達はダイヤモンド・スピリットの欠片を全部集めたことになっている。下手に競争するよりは、協力して、見返りに多少力を貸してもらった方がいいだろう」

その程度は、解説しなくてもわかれ。と言いたげに、アンバールはうるさそうに答えた。

うっ……点数落とした？

でも、訊かずにモヤモヤしてるのって、精神衛生上良くないよな
ー。プライバシーに関わることじゃないんだから、面倒くさがらず
に話してくれよー。

と、オレがアンバールを質問責めにしてると――。

オレ達の後ろで、驢馬くんがゼイゼイと荒い息を吐いて、へたり
と座り込んだ。

「あれ。疲れた？」

丈夫で我慢強そうな奴を選んだつもりだったんだけど。

アンバールが謎の兄ちゃんを驢馬くんの背中から下ろした。

「……ん？こいつ、こんなに重かったか？」

怪訝な顔をしながらも、畳んだテントと、背負っていた大剣と荷袋
を驢馬くんの背に積み直し、兄ちゃんを負ぶって歩き始めた。

ところが。

百歩と行かないうちに、アンバールも立ち止まった。

「……何なんだ、こいつは？明らかに、重くなっている！」

アンバールの背で、兄ちゃんが苦しそうに呻いた。やっと意識が
戻ったようだ。

「術が、切れかかっているんです。早く……きれいな水のある所へ
……」

術？術って、何の？……とかつて気にしてる暇はなさそうだ。

オレは耳を澄ませた。

「……あっち！川が流れてる」

街道を逸れて、驢馬を引っ張り、木々の間を先に立って案内する。
馬鹿力のアンバールが、歯を食いしばり、よろめきながらついて
くる。

川原の草地に辿り着くと、ほとんど一緒に倒れ込むようにして、
アンバールは兄ちゃんを地面に横たえた。

『すみません』

謝る兄ちゃんの声は、頭の中に直接響いた。

……え？

見る見るうちに、兄ちゃんの体が大きく膨れ上がる。

服や靴が弾け飛んだと思うと、枯れ草や木の皮、植物の綿毛に変わわり。全身がたちまち、髪の毛と同じ栗色の毛皮に覆われて——つて、お腹側は白いか？——体長は馬の三倍ぐらいはあろうかという、有翼の獣の姿に変化した。

持ち物はドラゴンの角が二本……って、あんた……。

そのものズバリ、飛竜^{ドラゴン}じゃねーかよっ！！

2-〔5〕 飛竜族の若者

ドラゴンっていうと、元の時代にいた頃は、爬虫類系のヤツをイメージしてた。

一般人がよくお目に掛かる水竜とか砂竜とかはそれで、ワニやトカゲ、蛇なんかが魔獣化したものらしい。

でも、多くがユークレイス山脈の山奥に籠もってしまったという飛竜は、実は哺乳類系なんだな。

こいつは、何と形容するのか……。

角が生えてて首が長くなって、たてがみがある辺りは、鹿とかキリンの仲間のように見える。でも蹄じゃなくて五本指だし、鼻や口の形からは、垂れ耳わんこにコウモリみたいな翼をくつつけたもの、と言った方が近いような気がする。

間近に見ると毛並みがふかふかで、ついナデナデしたくなるけど……気易く触ると怒られるんだろうな！。

”知恵ある竜”とも呼ばれる飛竜は、三百年以上もの寿命があって、人間なんかよりずっと賢い生き物なんだそうだ。

当然、本来は牛馬のように調教して人間に従わせることなんか出来ない。魔力も人間よりずっと強くって、人間の方が頭を垂れ、礼儀を持って教えを乞わなくちゃならないような存在なんだ。

ギヤマニア王国の竜騎兵隊は、飛竜を魔獣化し、知能は破壊して体力や魔法の息プレスによる攻撃力だけを強化することで、戦争の道具にしている。

人間を奴隷にするのと同様か、それ以上の腐れ外道的手法と云っている。飛竜族は勿論のこと、人間の諸外国も猛反発している。飛竜が人里まで下りてきて、魔法技術とかの面で協力してくれることがめっきり減ってしまったんだ。

国籍不祥の謎の兄ちゃん——もとい、兄ちゃんの変身の解けた栗色の飛竜は、川っぷちまでずりずりと這ってゆき、ごくごくと喉を

鳴らして透明な水を飲んだ。

ふしゅう、と一息吐いて、アンバーとオレを振り返る。

『助けて下さって有難うございます……、』

と礼を言いかけて、目を丸く——元々丸いけど——する。

『シトリン様!?!』

「へっ!?!」

飛竜はオレを見て驚きの声を上げ——っというか、声は出してなくて、驚いた念波みたいなのが頭の中に伝わってきた。

『……のはずはありませんね……。シトリン姫は水の魔道士ですから。でも、ならばどうして、ダイアモンド・スピリットの欠片を……?』

しかもよく見れば、お二人とも、違う時の流れの中からいらしたのですか……。? あなた方は、一体……。!?!』

おわ! 何でいきなり、色々見抜かれてるんだ!? それに、オレがシトリン姫に似てる、って……。? ?

動揺しまくるオレの横で、アンバーは冷静に言った。

「そいつは説明するにやぶさかじゃないが。まず先に、あんたの方の話を聞かせてもらいたいな。まあ……。その格好を見ればおよその事情はわかったが……。あんたが何者で、どうして王宮の警備兵に追われていたのか、とか」

『あ。そうでしたね、申し訳ありません』

飛竜は体ごとオレ達の方に向き直り、居住まいを正してちょこんとお座り——しようとしたけど、まだ疲れているらしく、前足の上に顎を載せて寝そべった。

『申し遅れました。僕はラピスと言います。ユークレイス山中の飛竜の里に住む者です。』

ギヤマニアの飛竜狩り隊に捕まった弟を追ってきたのです……。
ご存じのように、一度魔獣化してしまったモノを元に戻す術はありません。一度枯れた花にいくら水を注いでも、もう瑞々しく生き返ることが無いように……。

僕達の両親も、かつてスतालビアの魔道士達に協力していたのですが……ギヤマニア軍に捕らわれて軍用竜にされてしまいました。彼らに匹敵する魔力を持つ者が他におらず……僕が戦って倒すしかありませんでした……。

今度こそ……何としても弟だけは、手遅れになる前に、助け出したい……』

栗色の飛竜――ラピスは目を閉じ、微かに首を振った。

うわ……。すっげーわかる。絶対助けられないってわかってても……親を手にかけるなんてさ。オレ、今でも夢に見るもん……。

俄然、謝礼とか要らないから助太刀したくなってきた。……と言いたいとこだけど、悲しいかな、一人暮らしの間に染み付いた貧乏根性がそれを許さないのだった。頂くもんはきっちり頂いとくぜー。とはいえ。

『竜騎兵隊の大規模な基地があるのは、王都シャンデリアと、南部の……コランダム島侵攻の拠点になっているタイガーアイ要塞の二ヶ所です。連れて行かれるとすればどちらかでしょう。王都にはいませんでしたから、これからタイガーアイ要塞の方に当たってみようと思っています』

ラピスはレクサンドラ大公国経由で、北からギヤマニア王国に入ったそうだ。

だろうね。南のコランダム島経由じゃ、ギヤマニアに占領されるスतालビア公国の領内を通ることになるし、内海のコーラル海を渡ってくると、途中で身を隠す場所が無いもんねえ。

『あの、それで、返礼の件ですけど……弟を助け出すまで待つて頂いてもいいですか？

角一本なら、差し上げても差し支えは無いとは思いますが……万が一にも、僕まで捕まって魔獣化されるわけにはいきません。里長達には黙って出てきたのです、迷惑をかけたくありません。万全を期したいのです。勝手かとは思いますが……』

アンバールは溜め息を吐いた。

「あんたの正体がわかってみれば、生身のドラゴンから角を取ろうとは思わんさ。礼は、金品以外のものでもらおう」

うん。オレだってね。

ドラゴンって、角で周りのあれやこれやの魔力を感知してるんだって。事故で折れてしまった時とか、数年毎の生え替わりの期間とかには、不自由するものらしい。

猫のヒゲを切ると空間感覚が狂ってしまうのと、似たようなものかな？

「さっきの口振りだと、あんたは里でもかなり強い方らしいな」

『ええ、まあ……自分で言うのも何ですけど、今、里の百歳以下の若者世代で、“二つ角”は長の姫のガーネット様の他には、僕だけです。風属性だけでなく、水属性の魔法も使えますし』

ほとんどの人間や生き物は、火水風土、どれか一つの属性の魔法しか使えない。飛竜族の場合は、基本的にみんな風属性だ。

でも稀に、“二重属性”以上の種族や個体も存在する。ただし、火と水、風と土の魔法はそれぞれ打ち消しあうのが普通で、反対属性の二重属性や、三重属性以上というのは、ものすごく稀だ。

それはともかく。

「“二つ角”って？」

と、オレは尋ねた。

飛竜はみんな、角が二本あるけど？

『魔力が強くなるほど、角が長く伸びて、枝分かれもしてくるんです。今の里長は“四つ角”ですよ』

あ、そうなんだ。ラピスの角は二股に枝分かれしてるけど、それって特別なことだったんだ。王都の上空を飛ぶ竜騎兵の竜に、二股の角のヤツが珍しくないのは、魔獣化によって魔力が強化されてたんだな。

でも、そんな強い割には、さっきはかなりバテてたよな。何があったわけ？

『お恥ずかしい限りです……。王都の“気”が予想以上に濁って

いて、力を消耗してしまいました』

人が沢山集まる大都市では、空気も、水も土も汚れている。一方で、各ご家庭やあちこちの工房で燃料を使うし、石造りの建物が多く植物は少なくて気温が上がりやすかったりで、火の”気”だけは強い。

風と水属性のラピスにとっては、ただでさえ街は苦手なんだ。その上、王都では並みの都市以上に魔法が多用されていて、魔法を使うのに必要な”気”が希薄な環境なんだって。人間の姿に変身し続けているだけで、思った以上に疲れてしまったらしい。

ふーん？でも、そういうことなら……。

「オレも風の魔道士だけど、元氣だよ？」

『あなたはずっと、神殿にいらしたのでしょうか？神殿の敷地内は、“気”のバランスが保たれるように設計されていますから』

ほえー。知らなかった！

ところで、あと……。

「百歳以下が”若者”って……因みに、ラピスは幾つ？」
『六十八です』

げー！兄ちゃんどころか、立派なじーちゃんだったんだ！……って、まあ、寿命が三、四倍あるから……人間に換算すると、まだ二十歳前後ってとこなのかな。

「おい、こら。話がどんどん、脇道に逸れてるぞ」
と、アンバールが呆れた。

あ、ゴメン。ラピスを助けた返礼をどうするかってのが、本題だったな。

アンバールは、オレ達が三百年後の世界から来た、シトリン姫とバルトー公子の子孫だって話をした。

トレジャーハンター、つまり盗掘師なんつーいかがわしい生業で稼いでることはさり気なくスルーして。御先祖の遺産を求めてやってきたシャンドリア城から、ダイアモンド・スピリットの魔力のせいで過去に飛ばされてしまったらしいこと。

ラピスが、人間よりも知識や魔力が豊富な飛竜族なら、元の時代に戻る方法を知らないか。知っていたら力を貸してほしい、ということ……。

『そうでしたか……。俄には信じがたいお話ですが……。

あなた方の”気”の性質は確かに、シトリン様とバルトー様のものによく似ています。魔力場の極めて薄い環境からいらしたのに、人間としては希有なほど強い魔法の素質をお持ちだということも、わかります。

信じざるを得ません』

あれ、また。さっきから気になってたんだけど……、

「ラピスは、シトリン姫に会ったことあるんだ？ バルトー公子にも？」

『はい。里長は近年、”気”の乱れた下界に下りると体調が優れなくて。人間族の首長達との外交は、ほとんど一人娘のガーネット様が代行しているんです。僕も姫様にお供して、何度かシトリン様やバルトー様との会談にもご一緒させて頂きました』

それって、コネって言えるレベル？ 必要とあらば、御先祖様達にも力を貸してもらえそうかな？

『それは勿論、またお会いする機会があれば、僕からもお願いしてみますが……』

ラピスは、耳や鼻をぴくぴくさせて、何か考え込んでいる。

『おかしいですね……。そもそも、あなた方がこの時代にいらしたのは、偶然の事故ではないはずです。時間移動の魔法は非常に難しいんですよ。僕も、成功例を知りません。

あなた方お二人だけ、ダイヤモンド・スピリットの欠片が一つ二つだけで、しかも魔力場が失われた世界では……とても、十分な魔力は集まらなかったでしょう。

こちら側から、喚ばれたのだと思います』

「喚ばれた？……誰に？ 何のために？」

『そこが、わからないのです。時間移動の魔法を成功させるには、

恐らく、人間ならばシトリン様やバルト様ぐらい、飛竜族であれば”二つ角”以上の使い手が複数……各国が一つずつしか保有していないダイヤモンド・スピリットも複数、必要になります。

そのような大掛かりな魔法儀式が行われたのなら、事前に首長級の会合が持たれたはずですけど。そんな話は全く耳にしていません……」

「ダイヤモンド・スピリットが……各国に一つずつ？」

『ええ。かつて一つの巨大な結晶だったダイヤモンド・スピリットが七つに砕けた時、五つの人間族の国と飛竜族に一つずつ分け与えられ、残る一つは、誰にもわからない場所に隠されたそうです』

「それって、やっぱし、神様の手で……とか？」

とオレが言いかけたら、

「そんな神秘的な話じゃないだろう」

と、アンバールがドライに言った。

古代文明時代の、同盟国会議のようなものによって——だろう。

アンバールの言葉に、ラピスは頷いた。

ただの伝説じゃなかったんだ。實在、したんだ……！

むかし昔、オレ達の時代から千五百年以上も前——この時代から遡っても千二、三百年以上前のこと。

オパール大陸南部に広がるフrint沙漠は、その頃緑豊かな大地で、幾つもの国々から成る一大文明圏が存在したという。それが、遙か南洋の別の大陸の文明圏とドンパチ大戦争をやらかした挙げ句、双方とも壊滅的な打撃をこうむって、大陸のほとんどの部分が不毛の荒野になってしまったんだって。

今ある国々は、その時生き残った僅かな人々が、当時は未開だった”辺地”に移り住んで作られたもの。そして、ダイヤモンド・スピリットは、古代文明を滅ぼした超魔法兵器の動力源だった……っというんだな。一国で保持するにはあまりにも危険な力だけど、世界的な危機——例えば、南大陸の文明圏が再び戦争を仕掛けてきた

時とか、今みたいに魔法的な環境変動が起きた時——に備えて維持した方がいいだろうということで、分散管理することになった、らしい。

各国の版図は、勿論、千年以上もそのままの形で保たれてきたわけじゃない。集合離散を繰り返してる。

ただ、七つの欠片に分かれても、ダイヤモンド・スピリットの力は絶大だった。持たない国はどうしても、持つ国に吸収されがちだったし、一国で複数持っても、分派闘争が起きた時それぞれ一つずつ持って独立したりで、“一国に一つ”の状態が続いてきたみたいだ。

三百年前の“魔竜戦争”ですら、どこまで本当の話だか疑問視されてるのに、古代文明なんて、オレ達の時代じゃホラ話だと思われてる。

フリント沙漠の中に、破壊を免れた地底都市やら空中都市やらの遺跡があって、お宝がザクザク眠っている——とか。遙か南方の大陸にも、古代魔法大戦を生き延びた人達が国を作っていて、今も魔法が息づいている——とか。

噂は多々あれど、何せ、確かにフリント沙漠以南まで行って還ってきた人間とか、南方大陸から来た人間とかが、誰もいない。時々、そうと自称する怪しげなヤツはいてもね。

時間移動の魔法についても。フリントの古代都市の中には、街ぐるみで未来に移転して逃れる魔法装置を備えたものもあったそう。大陸の大部分が一瞬で破壊された時、装置は作動した……らしい。街は、瓦一枚残さずに消えた。でも現代に至るまで、再び出現はしていないんで、魔法が成功したかどうかはわからないんだな。

時々、古代文明の遺物だとか、南方大陸から漂着した珍しい動植物の標本だとかいう物が売り出されてるけど、九割九分九厘まで、真っ赤な偽物だとわかる代物だ。そういうペテンが横行してるから、古代文明なんてものが自体が作り話だろうと思われてるわけ。

だけど、あやふやな、断片的な噂話とかの中から事実を探り当て

てお宝に辿り着くのが、オレ達トレジャーハンターだからね。

一見突飛な伝説でも、頭っから否定はしない。といっても、神様のお告げだの奇跡だのを鵜呑みにするわけじゃ勿論なくて、そこに人為的なカラクリが働いていないかとか、考えるんだ。

ま、天罰だの悪霊の祟りだのを真に受けてたら、墓ドロボーなんて出来ないもん。……って、オレは実の所アンバーほど割り切れてなくて、結構ビビりながら仕事してる時もあるんだけど……鼻で笑われるだろうから、そんなことは口が裂けても言えない。

ともかく。今も、オレ達が過去に飛ばされてきたのが呪いだとか天命だとか言われるよりは、誰かに何かの目的で喚ばれたんだろうって言われた方が納得するね。

どこのどいつか知らないけど、勝手に呼び付けやがって。滞在費は、実費に慰謝料も加算して、きっちり請求するからなっ！

「ところで、さ。わざわざ喚ばれるほど、実はオレって強い魔道士だったりする？」

『今は魔法の使い方に慣れていらっしやらないでしょうが、素質としては、シトリン様やバルトー様と肩を並べるほどの力はお持ちだと思いますよ』

アンバーが、不愉快そうに尋ねる。

「もしや、俺もか？」

『はい』

「……属性は、火か」

『はい。お気付きでしたか』

「矢張り、そうか……」

アンバーは溜め息を吐き、くしゃくしゃと髪を掻き回した。

「あれ。嬉しくないのか？」

「聞いたことがある。バルトー公子とシトリン姫を助けて一緒に旅をした、身元不明の魔道士の言い伝えを……。一人は風の、もう一人は火の魔道士だったそうだ」

……。それって……。

「もしかして、オレ達を呼び出したのは御先祖様達ってこと！？ギヤマニアに対抗するための戦力として？」

ラピスが口を——っていうか、考えを挟んだ。うう、この頭の中に直接声が流れ込んでくるのって、何か気持ち悪い……。

『ちよっと待って下さい。バルトー公子もシトリン姫も、今はそれぞれに亡命中なんです。両国が保有するダイヤモンド・スピリットに近付くことも出来ないばかりか、お互いに連絡を取る手段も満足にお持ちではないはずです』

あ。そうだった……。

じゃあ、誰が、どうして？

……と考えた所で、現状では十分な判断材料がない。差し当たってアンバールとオレは、ラピスが弟を捜すのを引き続き手伝う代わり、バルトー公子かシトリン姫、もしくはその両方と会って話をする機会を作ってもらう取り決めをした。

タイガーアイ要塞にダイヤモンド・スピリットがあるならば、きっと飛竜を軍用に改造する魔法にも使われているだろう。弟がそこに囚われている可能性も高い、とラピスと言う。

飛竜の姿のままじゃ目立って、また狙われてしまう。ので、ラピスはもう一度人間に変身して、オレ達と一緒に歩いていくことにした。

水辺で一休みして風と水の気を補給したから、変身魔法を使える程度には回復した、という。ひゅううーっと細く長く一呼吸すると——飛竜族は、魔法を使うのに呪文を唱える必要は無いんだって——ラピスは再び、栗色の髪、瑠璃色の瞳の兄ちゃんの姿になった。

「矢っ張り、この格好の方が話し易いですか？」

「それはそーだけど、まずは服着ろよ、服っ」

「あ、すみません」

ラピスは適当にそこら辺の木の皮やら、草の蔓やら綿毛やらを拾って、次々と魔法で服や靴に変えてゆく。最後に、リュートみたい

な木の胴の弦楽器を作って背負うと、あっという間に吟遊詩人風の旅人の出来上がり。

道理で、持ち物が全部新品ばかりだったはずだよ……。

「便利だなー……」

「錬金術じゃありませんよ。あくまでも一時的に、仮初めに形を変えているだけです。僕が身に着けている間はずっとこの形を保ちますが、手放せば、長くとも一日ぐらいで元の物体に戻ってしまします」

武器防具は帯びず、一見したところ体力無さそうな細っこいモヤシ青年だけど、荷物持ちの驢馬くんはすっかり警戒してしまっている。怖がって避けようとするので、アンバールが二十歩ぐらいラピスとオレより先を、驢馬くんを引いて歩いてゆく。

丁度いいや。

「あのさ、ラピス。一目で、オレが風の魔道士だとか、他の時代から来たとかわかるぐらいだったら、ひょっとして……」

……ごによごによ、ごによ。

「え？ 勿論、わかりましたよ」

あちゃー。矢っ張り？

「それ、アンバールには内緒だから」

「えっ……！？ アンバールさんは、ご存じないんですか？」

ラピスは怪訝そうな顔をした。そーでしょーとも。

「あの……、人間同士では普通、わからないものなんですか？」

「わかる！ 普通は！ オレはわざと、わかりにくくしてるだけ」

「一体……どうして……」

「どうして、って言われても……人間には色々、人間の事情があるんだよ」

「はあ……そういうものですか」

うん。深くは気にしないでくれ。

アンバールが振り返った。

「何をコソコソ話している？」

「ベーツーにつ。ラピスだったら、古代文明の話とか詳しく知って
そうだから、色々教えてもらえば元の時代に帰った時役に立ちそう
だなあって思ってた」

「抜け駆けは無しだぞ」

実際、吟遊詩人に変装したのはダテじゃないらしい。

街道に戻って南へ歩く道すがら、ラピスは、昔々の歌物語とか、
遠い草原の民の牧歌とか、いい声で聞かせてくれた。

2-〔6〕 滅びを招く技術

「あれ？道、間違えた……？」

道路を大きな倒木が塞いでいた。何日も経ってるみたいな傷み方だ。

一日に何台も馬車が通るような街道なら、倒木はすぐに撤去されるか、少なくとも道幅の分だけは切って、交通に支障が無いようにするはず。

さつき分かれ道で、もう一本の道の方が新しくて、人が沢山通ってそうに見えたんだ。でも道幅が馬車一台分ぐらいしかなかったから、二車線のこっちが本道かなと思って……。

「上から確かめましょうか」

と言ってラピスが、道端に落ちていた鳥の羽毛を拾い上げた。

そいつに魔力を載せて、風で上空に飛ばすと、半径※三里（※十二キロメートル）以内ぐらいの”気”の状態を見渡せるんだって。

例えば、川や湖は水の”気”の塊として感じ取れるし、逆に人里や道路とかの開けた場所は、地表の温度が上がって火の”気”が強い。風の”気”の流れ方で、山か平地かとか、岩場か森かともわかるらしい。

ふうーん？でも、何かまだるっこそう……。

「目で見た方が早くねえ？ラピス、人間以外のものに変身したりは出来ないの？」

「出来ないことはありませんが……」

服とか靴とかの備品まで、一々魔法で作り返す方が、面倒臭いか。と思つたら、もっと根本的な難点があるらしい。

変身すると、体力や魔力が変身後の生き物相当のものになってしまふ。

人間なら、本来のドラゴンの姿でいる時に使える魔法のほとんどが――威力は多少落ちるものの――そのまま使用可能。

でも、例えば虫や小鳥になると、自由に変身を解除することさえ出来なくなる。誰かが外から魔法をかけてくれない限り、自然に術の効果が切れるまで待つしかなくなってしまうんだって。

そんな状態で、他の動物や魔獣に襲われたら……。

成る程ね。そこまで危険を冒す必要はないよな。

ってことで、羽根を飛ばす方法で地理観察してもらった。

「……歩いて※一刻（※三十分）ほどの位置に、無人の村があります。新しく、村を迂回する道を作ったのですね。先程の分かれ道まで引き返すよりは、このまま進んだ方がずっと”近い”ですよ。ただ、時間的に”早い”かどうかはわかりませんが」

「……って言うത്？」

「魔物化した植物の気配が集まっています。そのために、村を放棄したのでしょう」

アンバールが短く訊いた。

「植物でも、か？」

生えてる場所から動けないはずの植物でも、危険があるのか。倒すのに時間を取られるのか。……って意味だろう。

植物ぐらい、引っこ抜いて始末すればいいのじゃないか。村を放棄する必要があるのか。……って疑問まで含んでるのかもしれない。

「魔物は卵や種で殖えるわけではありません。”気”のバランスが乱れた動植物が変化するのです。ある場所で魔草がはびこり始めたなら、大抵は、その土地自体の”気”がもう大きく乱れています。後から後から、駆除しきれないほど魔物が発生するようになってしまふのですよ。」

毒を出したり、動物を捕らえて養分にしたりするような、直接的に有害な魔草は少ないですけど。魔草は並の植物よりはるかに成長が早くて、巨大にもなりますから、魔獣化した虫や草食動物が集まる誘因になります」

そいつは――、

「避けた方がいいのか？」

え？オレは今、『避けた方がいいな』って言おうとしたんだけど。アンバールの考えは違うんだ？

「この時代に来てから、魔物と戦ったのは一度きりだ。リスクが低いなら、肩慣らししておきたい。……こいつや驢馬に危険なようであれば、やめておくが」

と、アンバールはわしゃわしゃとオレの頭を撫でた。

おいコラッ！お荷物呼ばわりかよ！

「腕の程はわかります。アンバールさんなら、大丈夫でしょう」

「つて、ラピスもかい！オレのことは、戦力外通知かつ！？」

思わず、今度は声に出しちまった。

「あ、すみません。そういうつもりではないのですが……」

ニコニコと、優しくそんな目をオレに向けるラピス。

……。あー、そっか。

紳士的なんだね、ラピスは。女子供を危険にはさらさない、ってわけか。

だけど……、

「オレだって戦うって。ガキンチョ扱いしないでくれよな、二人して！」

腰に差した短剣の鞘をポンと叩いて、オレは胸を反らす。

「助かります、お二人がそう言って下さると。多少のリスクは覚悟して頂かなければなりません、村を通りたかったのです」

「え、どーゆうこと？」

「魔物は極力、見つけ次第退治するのが基本です。不必要に他の生き物を殺傷したり、貪食したりして、どんどん周りの自然を壊してしまいますから。放っておくと、連鎖的に魔物化が拡がりかねません。」

僕を助けたために、ろくな準備もなく旅立つことになったお二人を、無理に付き合わせようとは思いませんが……」

アンバールが、ちらりと横を見た。

「そうか。すると、ああいうザコでも、手間を惜しまず虱潰しにす

るべきなのか」

視線の先には……、

「うげえええっっ!？」

またまた、思わず裏返った声を出して、オレはラピスの陰に隠れてしまった。

け、けけけ毛虫っっ!!

体長※三、四尺（※約一メートル）はある超特大の毛虫が三匹ばかり、林の中で下草やら木の皮やらをムシヤムシヤ食べていた。

気っ色悪イーッッッ!!!

アンバールは、気付いていながら無視できちゃってたんだ？虫だけに！

……、……。

くっ、くだらん。これは、声に出したら間違いなく軽蔑されてた。いやいや、親父ギャグは人間関係の潤滑油。父ちゃんだって在りし日には、盗賊団の荒くれ男どもをまとめ上げるために……、って、自ボケ自ツツコミしてる場合じゃなーくーてーっ！

「!!!!」

ラピスにとっては、灯台下暗しというか。あんまりに雑魚すぎて、気配を察知出来なかったってとこなのかな。

急いで、手近な草を三本引き抜くと、フツと吹いた。

ヒュンッ。

風の魔法を載せたんだろう。草は投げナイフのように鋭く飛んで、特大毛虫どもの脳天を刺し貫いた。イチコロだ。

これは、ヤツらが弱すぎるのか、ラピスが強いのか……。まあ、両方なんだろうけど。

「そうですよ。大した害は無いと思って捨て置くと、もっと厄介な他の魔獣を出現させる元になります」

「腐った芋は周りの芋を腐らせる”……か」

アンバールの言葉に、ラピスは『え?』という顔をした。

あれ。もしかして、魔法時代が終わってから出来た諺なのかな。

”朱に交われれば赤くなる”とかいうのと同じ。悪い人間と付き合っていると、悪の道に染まる……みたいな。

別に、一個カビたり腐ったりしたのが混じっていると、周りのやつまで傷みやよくなるのは、どんな野菜や果物だって一緒だけだね。

オレ達の時代のギヤマニアでは、貧乏な農家はパンよりもジャガ芋を主食にしてる。……母ちゃんが生きてた頃のオレん家^ちだってそうだった。

だから、冬の間、貯蔵した芋が底の方から腐ってたりすると、切実に困るわけ。それで”芋”が代表選手なんだな。

……。世間的に”腐った芋”に分類される、オレみたいなトレジャーハンター（要するに墓ドロボー）としては、何か胸に突き刺さる諺である。

「それはそうと……おい、チビスケ。大丈夫か？」
アンバールが呆れた口調で言った。

「え？ あっ！」
無意識のうちにラピスの上着の裾をしっかりと握っていたオレは、慌てて手を離れた。

「ち、違うって！ 怖いんじゃない、気持ち悪かっただけ！ 倒せないってことは、なかった！」

まだ鳥肌が立ってるけど、うん、本当だよ。戦えるってば！

「ところで！ さっきから話聞いていると、ラピスは、どんな条件の時に普通の生き物が魔物になっちゃうか、知ってるんだ？」

教えてくれよ。オレ達、ここ十日ばかり調べたんだけど、全然わかんなくってさ」

「そうでしょうね。ギヤマニアでは」
ラピスは憂い顔を見ると、ひょいと倒木を跳び越えた。

「歩きながら、お話ししよう」

てくてく、てくてく。

「魔物を放つとくと、他の生き物を魔物化させるって……じゃあ、

あの噂は本当なんだ？魔物と接触すると魔物になるっていう……」

「当たらずとも遠からず、です。でも、伝染病のようなものではありませんよ。間近に接したからといって、それが直接の原因で”移る”ことはありません。あくまでも、”気”の乱れによるものです」

ラピスが挙げた、魔物化の主な要因は三つ。
一つは、魔法の使いすぎ。

魔法ってのは、例えば風の魔法なら風の”気”を周囲から引き寄せて、一カ所に集中させることで発動する。

強力な魔法を繰り返し使う・使われるとかすると、特定の”気”だけが消耗したり過剰になったりして、体がおかしくなってしまうんだって。

それも、自然な状態で使えるだけ使う分には、だいたい自然に回復するけど。魔道具——杖とか、護符とか——や魔法薬を使って、無理に魔力を強化したり回復させたりしていると、危ないんだそうだ。

「もしかして、これもヤバイの？」

と、オレは神殿でもらってきたお薬シロップの瓶を、ラピスに見せた。

「神殿で処方されるものは、効能が確かで、効き目も緩やかな薬がほとんどです。心配いりませんよ。ですが、軍隊で使用しているものや、民間で密売買されているものの中には、劇薬といってよいほど危険な薬もあります」

二つ目は、魔物化した生き物を食べることに。

体内に取り込むことで、外部から触れるよりもはるかに、”気”の偏りの影響を受けやすくなる。

野生動物は、本能的に食べたがらないことが多いそうだ。それから、カビとかミジンコみたいな、ものすごく小さくて単純な生き物は、そもそも魔物化しにくいらしい。

魔草や魔獣を食べるのは、おつむの発達してない昆虫や貝とか。そうでなければ、よっぽど飢えているか、既に魔獣化した・しかかっている動物。あとは、野性の勘が鈍ってる人間と、人間に飼い慣

らされた家畜ぐらいだそうである。

そして三つ目は、極端に”気”が偏ったり乱れたりした環境に、長時間身を曝すこと。

自然界には、そういう地点はほとんど存在しない——っていうか、火山の火口の溶岩溜まりとか、最果ての海の氷山とか、元々生き物が暮らすには過酷な場所ばかりなんだ。

でも近年、人為的な”危険地帯”が増えてる。

魔法をドカスカ使った戦場跡とか。魔法で火の”気”を集めた、高温の金属精製炉がある工場の周辺とか。

特に、今ギヤマニアで多いのが、促成栽培のために土や水の”気”を引き寄せる魔法陣で囲った、農地だということだ。

ラピスは、これから向かう廃村にも、まだ魔法陣が残っているのじゃないかと懸念している……そうだ。

「成る程ねえ……」

ビーストハンター
魔獣退治屋が魔獣化しやすい訳が納得出来た。

魔獣退治のためには魔法も使うだろうし、仕留めた獲物を食べることもあるだろう。それにそもそも、魔獣がいっぱい出没するのは、”気”の乱れた場所だってことだ。

魔物になりやすい条件が、三つとも当てはまっちゃうんだ。

「そのことを……ほとんどの奴が、知らずに仕事してる？」

「魔物化の条件なんて、ギヤマニア以外の国では、謎でも秘密でもありませんよ。むしろ、魔法を使う神官や魔道士にとっては常識とってよいぐらいです。」

僕達飛竜族が、もう五十年も前から、警鐘を鳴らしてきましたからね」

およそ五十年前、今のジェイド王のじーちゃんの代のこと。

ギヤマニアは、国民の一割が死亡するほどの大凶作に見舞われた。その翌年から、農地に日常的に魔法を注ぎ続けることで作物を増産する、”禁断の技”が使われ始めたんだって。

「気持ちわかります。ギヤマニアは本来、コランダムやレクサ

ンドラに比べると、ずっと貧しい土地なんです」

ギヤマニア人は、実は民族的にはオパールの沙漠の民に近い。

普通に考えたら、日射しの強い南の土地ほど、髪や肌の色の濃い民族が住んでそうなものだ。それなのに何故、黒眼黒髪のギヤマニア人の方が、金髪のコランダム人より北に根付いてるかっていうところ。

古代魔法大戦の後、生き残ったフリントの民は、新たな安住の地を求めて”辺地”に北上した。コランダム島には既に、先住民が文明国家を築いていたので、追い払われて、当時ほとんど無人だったギヤマニア島に流れ着いたのだそうだ。

因みに、レクサンドラはその中間。金髪の先住民と、黒髪の移住民が混じり合って暮らすうち、茶色い髪の一つの民族になったんだ。……つと、それはさておき。

”残り物”だったギヤマニア島は、当然と言えば当然ながら、住みにくい土地だった。

斧を拒む鬱蒼とした森に覆われ——そのおかげで現代でも、オレ達みたいな無法者アウトローは隠れ家に不自由しないんだけど——、冬は雪深く寒さが厳しい。金属とか宝石とか、燃料とかの鉱物資源も乏しい。ギヤマニア人達は長年、不利な条件で、特にコランダム島からの輸入に頼らざるをえなかった。

「他の国々が猛反対すれば、諦めるよりは力押しでねじ伏せようとするのも、無理からぬことでした」

ギヤマニアは過去にも何度か、同じような”禁術”に手を出している。でもその度に、諸外国は輸出をストップしたり、軍事的に圧力をかけたりして、やめさせてきた。

魔法を使いすぎれば、”気”の乱れは一国に留まらない。不作とか魔物化とかの影響が、周りの国々にまで広がってしまうからね。

これまでは、特に飛竜族の説得と制裁が功を奏して……、それに何より、魔獣による被害にギヤマニア人自身が困って、計画は頓挫してきたんだとか。

だけど、今回は違う。

王宮魔道士達は、農業技術と併行して、軍事技術の開発と実用化も推し進めた。

魔獣が出現しても、それをまた、強力な魔法で退治する。諸外国を侵略して、魔力を持った鉱石やダイヤモンド・スピリットを手に入れようとする。

これは、一か八かの賭けだ。国が、いや世界全体が荒廃するのが先か？それとも、安全に、持続的に利用出来る魔法技術を開発出来るのが先か？

「今よりも遙かに魔法技術の進んでいた、フリント文明時代でさえ、大地の恵みの限界を超えることは出来なかったのです。その後、僕達飛竜族も研究を重ねてきましたが、魔物化や土壌の劣化を引き起こさずに作物を増産する”永久機関”などは出来ませんでした」

古代魔法大戦から千年以上経っても、フリント沙漠は不毛の荒野のままだ。

確かに、一度完全に裸地になると、肥えた表土が雨風に流されてしまつて、緑が戻りにくくはなる。それでも雨さえ降るならば、鳥や動物が運んでくる種が芽吹く。まずは草原が、それから森が、だんだんと育ってゆくはずなんだけど……。

魔法で養分を吸い上げすぎたために、土が痩せきっているんだ。

「それは、これまで開発出来なかった技術だからといって、これからの開発出来ないとは限りませんよ。”挑戦する”のは悪いことではありませんが……、でも、”当てにする”にはあまりにも成功の見込みが薄い。

ギヤマニア人達が今のペースで魔法を使い続ければ、もう百年と経たないうちに、フリント沙漠より北に人の住める土地は無くなつてしまうでしょう」

ラピスは溜め息を吐いた。

「ジェイド王と王宮魔道士達は、魔物化の原理を国民には秘匿しています。

とはいえ、歴史の記録や外国からの情報を完全に抹消することは出来ませんし、魔獣退治屋達^{ビーストハンター}などは経験的に気付くと思うのですが……。

それでも真実の知識が広まらないのは、”信じたくない”からでしょうね。今の豊かな暮らしを支えている技術が、破滅的なものだということを。

『魔法の使いすぎが魔物化の原因だ……などというのは、魔法技術の抜きん出たギヤマニアを弱体化させるためにコランダム人がばらまいた流説だ』と言われれば、そちらの方に説得力を感じてしまう。

五十年前の大飢饉を経験している人達が、特にそうなのです。知恵があるはずの年配者がそういう見解では、若い人達を啓蒙してゆくのも難しいことです」

うーん……。オレも、その気持ちはわかるよ。

オレが五才の時も、凶作だった。その年生まれた弟は、最初っから体が小さかったけど、やせっぽちのまま三ヶ月ぐらいですぐに死んでしまった。いつもひもじそうに弱々しく泣いていた声が、今も耳に残ってる……。

そんなことが、国中で起こったのなら――。

危険な、未完成の技術だとしても手を出さずにはいられないだろうし、そこから”腐った芋……”の諺が使われないくらい、毎日どっさりパンが食べられるようになったら、元の生活水準に戻りたくはないわな。

だけど……。

「あ……」

道路の真ん中で、人間の胴体ほどの太さもある、巨大ミミズがのたうち回っていた。腹がパンパンに膨れて破れ、中から落ち葉がはみ出している。

ラピスはまた、口笛を吹くみたいにひゅうつと細く息を吐いた。銀色の糸みたいなのが巨大ミミズに絡みついて、たちまち繭を作

り……、いや、違う？

ミミズ魔獣の体が見る見るしぼんで、干からびていく。

水の魔法か！銀色に光って見えるのは、霧みたいに細かな水滴だ。水分を、強制的に体の外に絞り出しているんだ。

あつという間に、巨大なミミズの干物の出来上がり。ミミズは真つ二つに切ったって再生するぐらいだもんね、こういう倒し方でもしないと……。

しかし、これ、人間相手に使ったら相当エグい技だぞ。飛竜族を敵に回すのは、滅茶苦茶ヤバそうである。

「魔獣になった生き物も苦しいのです。被害者なのですよ。

魔物化は、病気や奇形と同類の”異常”です。生物が環境に適應するために姿形を変える、自然な反応とは、根本的に違います。

ほとんどはこのように、攻撃衝動や食欲に引きずり回されて我が身を壊し、放っておいても一週間ほどで自滅してしまいます。次の世代を遺すこともありません。

憐れな生き物を、これ以上増やさないためにも……」

ラピスが足を止めた。どうやら、村の入り口に着いたみたいだ。

「こいつは……」

アンバールが唸った。

異様な光景が広がっている。

立ち枯れた林の向こうに、木みたいにバカでっかいスギナやクローバーがよきによき生えている。見ている間にも成長中で、うねうねと葉っぱをくねらせて、動物みたいに揺れ動く。それを、矢張りバカでっかい芋虫毛虫や、やけにゴロンと太ったウサギがバリバリかじってる。

魔法の影響の受けやすさとかが違うのかな？体の大きさは、生き物本来の大きさに比例するわけじゃないみたいだ。

「塩……？」

オレはしゃがんで、カチコチに固い、白っぽく粉を吹いた地面に触ってみた。

荷物持ちの驢馬くんが舐めたけど、すぐにペッペッと吐き出してしまった。

「そうです。魔草が無理に水分や養分を吸い上げているために、普通の植物が育たないほど塩分や酸が濃くなっています」

ラピスはアンバールを振り返った。

「これからまず、あそこにいる魔獣達を倒します。そうすると、血の匂いに引かれて、肉食の魔獣達も集まってくるはずですよ。

弱すぎたり強すぎたりする魔獣は僕が引き受けますから、存分に腕試しして下さい」

「世話にはならん。一人で全部ぶった切ってやるさ」

背中にしよった大剣の鞘を抜き払い、不敵な薄笑みを浮かべるアンバール。

「一人で、って……だから、オ・レ・はっ!？」

「お前さんは驢馬のお守りでもしてろ!」

ラピスが、すいと両手を前に上げる。

「いいですか? いきますよ……」

2 「7」 廃村に棲むモノ達

ヒュヒュ、ヒュンツ。

ラピスは、さっきの風の矢を十本同時に打った。多分、全部の指から一本ずつ。

ひょえー……！全弾命中、しかも一撃必殺だ。いくら相手が雑魚とはいえ、ラピスって相当強いんじゃないだろうか。

シーン……。

しばらくはただ、サワサワと魔草が揺らめく音だけがしていたけど――、

パサパサパサ……。

来た来た、来たっ！

まずは、オレが両腕を広げたぐらいの大きさもある、蝶の魔獣が三匹。

あれ？でも、こいつらって肉食だっけ？と、思っていたら――。死んだ魔獣達の傷口から、ちゅーちゅーと血や内臓を吸い始めた。うげ！ま・そうか。魔草は無秩序に葉っぱを生い茂らせるだけで、こいつらに蜜を提供するような巨大な花を咲かせたりはしないんだろう。

……って、この非常時に。またしても、何をダジャレてるんだコレはっ？

いやいや、リラックスして平常心を保つためにはだな……、ブンッ！！

あ。オレがアホなこと考えてる間に、アンバーがまとめて一薙ぎにした。

飛び散る鱗粉をちよつと吸い込むと、咳き込んで後退る。

「元の生き物には無い毒やトゲを持っているものもあります！気を付けて下さい！」

「覚えておく！」

アンバールが剣を振るうところを見るのは、これで三度目だ。元の時代にいた時に一度と、二度目はこの時代に來た最初の日に。

二度だけでも充分、鬼みたいに強いのはわかってるけど。まだまだ、氷山の一角だろう。お手並み拝見させてもらうぜー。

グエエエコ。

お次は、小岩みたいなヒキガエル。

動きがトロくて、アンバールが振り下ろす剣を避ける暇も無く――、あらら？ 皮膚がぬめぬめして、かなり弾力があるらしく、刃が滑った。

アンバールは素早く剣を引いて、シュッと伸びてきた長い舌を避けると――、

ダンツツ！！

踏み込んで、開いた口の中に突きをくれてやった。ほい、二丁上がり。

カサ、カササ……。

牧羊犬ぐらいの大きさの、蟻の群れも集まってきた。

蟻って小さくても、噛まれると痛いんだよね。顎の力が強くて、自分よりずっと大きな獲物も引きずって運んでいっちゃうし、蟻酸を持ってるヤツもいる。

このサイズになると、結構な難敵かも……。

……って思ったけど、噛み付かれる前に全部斬り伏せてりゃ問題なし。右に左にぺちぷち叩き潰し、足許に寄ってきたヤツは蹴りで頭を吹っ飛ばしたりもしてる。

おー、軽い軽い。この調子なら、百匹来たって余裕だろ。

と、見る間に――。

キイキイツ。

うげげ！ 豚サイズのネズミ！ こいつは機敏だ。

「ッ！！」

今日初めて、アンバールの剣が空振りし、逆に化けネズミの前歯が腕をかすめた。

アンボールは、ヒュツと鋭く息を吸い込む。

「タアッ！」

シュバツ！！

気合い一声、振り抜いた剣は、ものの見事に化けネズミを二枚に下ろした。

あーらら、『面白くなってきた』みたいな顔しちゃって……。

ま、このところ図書館に籠もりつきりで、あんまり体動かしてなかったから、くさくさしてたんだろうけどさ。

あつぶねーなー、もー。トレジャーハンターってのはもっと、非戦平和主義の人間がやるもんだぜ？

……つとと、呑気に見物してる場合じゃない。こっちにもドデカ蟻が来たっ！

カキンッ。

「ほえ！？」

硬い！短剣が弾かれた！

「うわわっ」

オレは慌てて腕をぶん回して、取り付いてきたドデカ蟻を地面に叩き付けた。

「関節を狙え！」

アンボールが叫ぶ。

成る程、デカくなっても弱点は変わらないか。

「ええいっ！」

うへっ、それでも結構、力いるよう。二回、三回と同じ所に斬りかかって、やっと胸と腹の節目を切り離した。

傍目には楽勝に見えたけど、矢っ張りアンボールがアホみたいに強いんだなー。

カサコソ、カサコソ……。

うげげげっ！今度は、盾かと思うぐらいにでっかいゴキブリだ！！とりあえず、ピコピコと揺れてる触覚を斬り落とす。と、

バツ！！

いきなり、羽根を広げて飛んできたっ！

「ぎゃーっ!？」

すんでの所でかわしたオレの頭上を、

ビュンッ。

何か、もっと大きな影が風を切って通り過ぎた。

あれは……、百舌鳥^{モズ}!？」

巨大ゴキブリをくわえたヤツの他に、もう一羽!あのサイズじゃ、
驢馬くんやオレだって速贄^{はやにえ}にされちまいそーだよ。猛烈にヤバイッ
ッ!!

と、驢馬くんを背に庇ったオレの前に、更にラピスが立った。

両手の人差し指で、くるりと空中に輪を描くと――、
シュルンッ。

淡く光る風の輪が、まるで大っきなネズミ花火を空に投げ上げた
みたいに――って、良い子はそんなことしたことないだろうし、し
ちやいけないんだけど――放物線を描いて飛んでった。

さっきのが”風の矢”なら、こっちは”風の戦輪”^{ウインドチャクラム}ってどこか。
デデッ。

百舌鳥達はヒラリと身を翻してかわしたけど、風の輪の軌道がぐ
んつと曲がって追いかける。^{ホーミングタイプ}自動追尾型?それとも、二つ同時に操
ってるのだとしたら、かなりの高等テクニックだと思うぞ。

ギヤッ!

風の輪は、まず翼を切り裂き、百舌鳥達がバランスを崩したところ
で、喉や首の後ろをかき切って止めを刺した。

ドサッと落ちてきた巨大百舌鳥達の体を跳び越え、ラピスは村の
囲いの中に向かって走り出した。

「まだ”生きている”魔法陣の在り処が見えました!壊してきます
!」

おー、いつてらっしやい。魔力の源を断てば、これ以上ザコ魔獣
が発生するのを止められるんだろうし、今いる魔獣達の力も削げる
……のかな?多分。

それにしても、後から後からわらわらと……。本来の数十倍から百倍サイズの蟻やテントウ虫、ダンゴ虫なんかを、九割方はアンバールが、一割ぐらいはオレが、片っ端から潰してゆく。

こういう比較的無害なヤツらでさえ、倒すのに手間を取られるんだ。もしもスズメバチとか熊とか、最初っから危険な生き物が魔獣化したら……。と、思っていると。

ガルルルル……。

悪い予感、的中。魔獣化した野犬だ。ただ図体が牛ほどにデカくなってるだけじゃなくて、毛皮がハリネズミみたいにトゲトゲしてる。

流石に、アンバールの表情から余裕が消えた。

ウォンッ！

飛びかかってきた魔犬の鼻面に、アンバールはさっき倒した蝶の死骸を剣で引っ掛けて跳ね上げ、叩き付けた。

フシュウッ、クシュンッ。

魔犬はぶるっと首を振り、くしゃみをした。毒の鱗粉を吸い込んだんだ。どんな効果があるのか知らないけど、少しは有利になってくれれば……。くれれば……。

「オオッ！」

パキキキ、パキンッ。

アンバールの大剣が当たると、まるで櫛を爪で弾いたような音が出て、針金みたいに硬い毛が折れて飛び散った。血は流れない。毛皮の下は皮膚までは、刃が届かなかったんだ。

魔犬は鋭い牙と爪で攻撃してくるだけじゃなくて、割合的に普通の犬よりずっと長い尻尾を連結棍棒フレイルみたいにぶん回す。あれでぶっ叩かれたら、かなり痛そうだ。

大丈夫かな？ラピスが戻って来るまで頑張ってくれよ、アンバール！オレなんかじゃ、どう考えたって太刀打ち出来そうにないもん！

と、固唾を飲んで見守るオレの上に、不吉な影が覆い被さる。

シューシューという不気味な音は、もしかして……？

恐る恐る、振り返ると……。

……あああああ。”蛇に睨まれたカエル”って、まさにこんな気持ちだろう。

大蛇がチロチロと舌を出して、オレを見下ろしていた。

絶対ムリッッ！！逃げるが勝ちっっっ！！

——って、思っただけ。

後退ったら、お尻がトンと驢馬くん**にぶつか**った。荷物持ちの驢馬くんは、怯えきって、逃げることも出来ずに立ちすくんでいる。

……。オレの戦闘力は、誰かを守れるような代物じゃない。一撃^{ヒットアン}離脱のために一瞬相手をひるませるとか、メシにする兎や野鳥を狩る程度のものだ。

だけど……。

あー、もー！やるっきゃねーなーっ！かかってきやがれっっ！！

(やけくそ)

シューッ。シューッ。

大蛇は鎌首を上下させながら、だんだんオレに顔を近付けてくる。何とか……あの舌か、鼻先を切りつけてやれば……。

と、狙ってるうちに。

バクンッ！

「っ！！」

大蛇はオレの短剣に噛み付き、首を大きく振った！

やばいっっ！！

地面に頭から叩き付けられないようにするためには、自分から手を離して転がり、受け身を取るしかなかった。

シャーッッ！

大蛇は口をいっぱいに開け、オレを飲み込もうとする！

「っ……」

うぐぐぐっ……。上顎に両手を、下顎に右足をかけて踏ん張り、

どうにか堪えた。

大蛇はオレの背中を地面に押し付け、顔や腕をぺちゃぺちゃ舐め回す。

く、くしゅぐったい……。べとべとして、生臭くて、気持ち悪い……。

わ……。かえって、痛いのより力が抜けてく……。

……。……。もう駄目だっ!!

観念したその時、

「チビスケッ!？」

アンバールがこっちの様子に気付いて、叫んだ。直後に、ギャウツツ!!

魔犬が絶叫し、ドサツと倒れる音がした。

大蛇はオレから口を離し、駆け寄ってくるアンバールに噛み付こうと……。するより早く、

ザンツ!

アンバールの大剣が一閃して、一太刀で大蛇の頭を切り落とした。

お見事っ! やっぱ、半端じゃねえ腕前だな!

……。っと、感心してる場合じゃないっ。

オレは急いで短剣を拾い、油断無くぐるりを見回した。

……おお? 今まで風もないのにわさわさ揺れてた魔草が、成長を止め、立ち枯れてゆく。

「アンバールさん! エメルダさん! ご無事ですか?」

ラピスが、水の鞭みたいなので残り僅かな巨大昆虫を退治しながら、走って戻って来た。

「……。はああ……。……」

ホッと気が緩んで、一息吐いたオレの頭の上から――、

「この馬鹿が」

ひえいっ!!

アンバールの、冷たい怒った声が浴びせかけられた。

氷のように冷静なのが、さっきの魔犬の吠える声よりよっぽど怖いんですけど……。

「お前さんは、驢馬を庇うためになんぞ命を捨てる気だったのか？」

むっ！

「何だよ……、驢馬のお守りをしてろって言ったの、お前じゃないか！こいつを化け物の餌にして逃げた方が良かったってのか？」

「逃げなかったのが悪いとは言っていない！」

ラピスがオレ達の横に来て、それぞれの肩に手を置いた。

「アンバールさん、そんな言い方をしなくてもいいでしょう。それに、エメルダさんも」

じっとオレの目を見て、ラピスは微笑んだ。

「逃げるわけにはいかない。でも、とても自分の手には負えない。

そんな時、捨て身で戦うより他に、出来ることはありませんか」

「……？えー……っ……」

何だろう……。

考え込んで、ううーんと眉間に皺を寄せたオレに、ラピスは優しい目をして言った。

「”助けを呼ぶこと”ですよ」

「……、あ」

オレは、ぽかんと間抜けに口を開けてしまった。

「僕もアンバールさんも手が離せないだろうと思ったんですか？」

いや……、遠慮なんかじゃなくて。

ここんところずっと一人暮らしで、何でも自分でやるしかなかったから。そーゆう手もあるんだって発想自体が、マジですっば抜けたよ。

そんな事情を察したんだろうか。オレを見るラピスの目が、もつと優しくなった。

「いつでも声を掛けて下さい。どうしても手が回らない時は、矢張り自力で何とかしていただくしかありませんが……。

離れた場所からでも使える術も、色々あるんですよ。大概はフオー出来ると思います」

オレはラピスに飛び付いた。

「うわーっ！にーちゃん！！」

「え？どうしたんですか、急に？」

くー、人情が身に染みました！って、ラピスは”人”じゃないからこそ、こうやって気軽に抱き付いたり出来るんだけど。

いや、さ。このぐらい大げさに感激を表現しとかないとだな。うっかり涙ぐんだりしちゃったら、オレ、ホントに弱虫みたいに見えるだろうし。

「いやあ、ラピスって、すげー良い兄ちゃんなんだろうなって思っ
って」

「そうですか？普通にしているだけですが……。それなら、アンバールさんもでしょう」

ラピスは、アンバールにも微笑みかけた。

「あ？」

「アンバールさんが言いたかったのも、そういうことですよね」

「……」

「責任を感じてらっしゃるんでしょう。ご自分の言い出したことだから」

「……………」

おや？その、ものすごく不愉快そうな顔は……、凶星なわけ？

『余計な解説するな』とでも言いたげに、不機嫌そうに目を逸らして、アンバールはくしゃくしゃと前髪を掻いた。

「向こうの手の内を観察するために、止めを刺さずにいただけだ。今後の参考にしようと思ってな。お前さんの方が危ないとわかっていれば、時間は掛けなかった」

「え！あれでもまだ、遊んでたってのか！？」

「遊んでなぞいない。”真剣に練習していた”んだ」

はー…………！負け惜しみじゃないな、こりゃ。べらぼーな奴め！

ラピスがくすくすと笑う。

「もっと、核心をわかり易く伝えてあげればいいのに……。アンバーさんは一人っ子ですか？」

「……。少なくとも、弟が二人いるのは知っている。生まれてこの方、一度も顔を合わせたことは無いが」

「……はあ……。そうなんですね……」

こっ、こいつの家庭の事情には立ち入っちゃいけないさそうだ。

「ところで、ラピス。村の中に、井戸なんてなかった？」

「ありました、もう涸れていますよ。魔草がすっかり水分を吸い上げてしまったんですね」

そっか、残念。

「水が欲しいですか？」

「うん。顔、洗ったときたいなーと思って」

大蛇のヨダレがべとべと付いてるんだもん。本当はお風呂に入って、服も全部洗濯したいぐらいだけど、贅沢は言ってられない。

「大丈夫です。深い所の地下水は、今も流れていますよ」

と言って、ラピスが地面に手をかざすと、噴水みたいにしゅるしゅると水が噴き上がって、空中に大きな球を作った。

うっわー、便利！魔法って楽チンだね。

でも、こんなことしていると、また魔物が発生したりは……。

「個人で飲用や沐浴に使う程度でしたら、心配いりません」

それじゃ、有難く！

オレが水をすくい取ってパシヤパシヤ顔を洗っていると、アンバーも横に来て腕まくりし、化けネズミの前歯で切られた傷口を洗った。

その腕を、ずいとオレの目の前に突き出す。

……。いや、意味はわかるけど。

「アンバー、お前さ。何だよ、その当たり前みたいな態度は。」

『治癒魔法かけて下さいお願いします』とか何とか言えよな」

「それを言うなら、お前さんもだろう。命の危機を救われておきな

がら、事前に『頼む』とか事後に『有難う』とか言ったか？」

うっ！そーいや、忘れてた。

「……、助かったよ、有難う。ついでに、服の破れたところ繕ってやるよ」

「ああ、頼む」

相変わらず、木で鼻をくくったように無愛想に言うアンバー。

でも怪我を魔法で治した後、さっさと手早く、しかも縫い目の揃ったオレの針仕事を見ると、感心した声を上げた。

「器用なものだな」

「まーなっ、器用にもなるさ。毎日毎日、三十人分ぐらいの炊事洗濯とか怪我人の手当てとか、次々とこなしてりゃあね」

「……。つまり、戦力外でいつも裏方の雑用ばかりやっていた、とぐっ！

「仕方ないだろうっ！親父が健在だった頃はオレ、ホントにガキだったんだし！」

うぐぐー、痛い所をー……。

だけど、この強すぎるあんちゃん二人と一緒に旅をするには、今のオレじゃ確かに戦力外だ。ここは一つ――、

？ アンバーに剣を教えてもらう。

？ ラピスに魔法を教えてもらう。

？ いやいや、トレジャーハンターに攻撃力はいらない。あくまでも逃げるに徹する！

「ラピス！お願いがあるんだけど。人間でも使える魔法知ってたら、教えてくれる？」

ラピスの方が先生として優しそうだから――とかいう理由じゃないぜ。

三百年後の時代に戻った時のことを考えると、剣術の腕を上げていた方が使える。それに、剣は剣で修行しなくちゃいけないだろう

けど。一朝一夕に上達するもんじゃないよな。

魔法の方が、”伸びしろ”があると思うんだ。

「ごく初歩の魔法だけでしたら、喜んで」

え？どうということ？と、思ったら。

魔法の基礎中の基礎——周りの”気”の状態を感じ取ったり、それを操るために精神集中したりする方法は、種族が違ってても共通。だけど飛竜族と人間とじゃ、体のつくりも魔力の大きさも全然違うから、呪文とか補助動作とかの細かいことは人間の魔道士に訊かないとわからないだろう、って。

うん、差し当たってはそれで充分だよ。

「よろしくお願いします、”師匠”！」

よし、張り切っていこー！

繕い物を終えたオレは、元気よく立ち上がった。

けど、荷物持ちの驢馬くんは、まだ神経質そうにふるふる震えている。

立て続けに怖い目に遭わせちゃったもんなんー。ごめんね。

「いえ、そのせいだけではないでしょう。この驢馬も大分、弱っています。不自然に栽培された飼料ばかり与えられてきたようですね」

そっか。見た目、体が立派で丈夫そうな奴を選んで買ったつもりだったんだけど……。気を付けてやろう。

「そーいや、お前、まだ名前が無かったな」

何か考えようとしたら、

「名前は要らんだろう。どうせ、すぐに売り払う。愛着を持っても仕方ない」

……。あー、そういうことか。

アンバールが一向に、オレを名前で呼ぼうとしないのも。元の時代に帰れば、また商売敵に戻るんだから、ってことか。

でも、それって裏返すと……？

「何が可笑しい？」

ニヤリとほくそ笑んだオレを、仏頂面で睨むアンバー。だけど、さっきほど怖くないや。

いや、薄々思ってたんだけどね。こいつ、無愛想にしてる割には、実は面倒見がいいんじゃないかな？

2-〔8〕 特訓！

「天の雷、渦巻く風よ、岩をも砕く槍となれ……」

オレはゆつくりと呪文を唱え、前方にかざした右手に意識を集中させた。

「”雷皇旋”！」

溜めた魔力を一気に解き放つ。

右腕の周りに生まれた風の渦は……、あららー？進むにつれ拡散して、※十間（※約十八メートル）ぐらい離れた的に当たる頃には、ふんわりしたそよ風になって消えた。

「あーっ、また失敗かあ……」

オレはへたへたとしゃがみ込んで、息を整えた。春先だつてのに、汗が吹き出してくる。

「いいえ。そもそも、始めて三日で少しでも風が作れるだけで、大したものですよ」

ラピスがニコツと笑いかけてきた。

この、人間に変身した飛竜族のにーちゃんに出会ってから四日目。アンバールとオレは、魔獣退治したり、時々こうして風通しの良い原っぱでオレの魔法の練習のために立ち止まったりしながら、南街道を南下中。

驢馬くんもまだ一緒だ。体内の”気”のバランスが整うまで養生させた方がいいだろうってことで、今も近くの木陰で、土と水の”気”をたっぷり吸った野草をもしゃもしゃ食べてる。

「疲れてきたでしょう。休みましょうか」

「あ、ちよつと待った」

オレは手を挙げると、ピツと人差し指一本だけ立てた。

「もう一回！あと一回だけ！もう、あとほんのちょーっとでコツがつかめそうな気がするんだ」

魔法って、最初の一回が出来るようになるまでが大変らしい。逆

立ちとか、竹馬の乗り方を覚えるのと似たようなもんな。一度感覚をつかんでしまえば、あとは練習するにつれてスピードや威力が増していくものみたいだけど……。

一から二は量の変化だけど、ゼロから一は質の変化だ。

センスや運が良ければ、数日とか数週間で、この”最初の一段”ワンステップを越えられる。でも要領が悪いと、何ヶ月も何年もかかっちゃうこともあるんだって。

治癒魔法の時は、無我夢中のうちに一回目を成功させてたから、覚えるのは楽だった。

だけど攻撃魔法は……、苦戦中。

「……ふうう」

深呼吸を一つして、オレはうーんと伸びをしながら立ち上がった。

経験的に、疲労が限度に近いなーってのはわかる。

疲労の種類は違っても、武術とか、錠前外しピッキングの練習をする時も、そう。

これ以上は多分、ダラダラ時間をかけても、成功率が落ちるばかりだ。

でも……、これも経験的にわかるんだけど。さっきから、同じ所でぐるぐる迷ってるんじゃないかって、ほんの少ーしずつだけど正解に近付いてる感じがする。こういう、”あともう一息”って時は、練習を中断しない方がいいんだ。ここで休むと、積み上げてきた感覚を忘れて、また一からやり直しになっちゃう。

「……」

横でじーっとオレの様子を観察していたアンバーが、ラピスに声を掛けた。

「呪文や補助動作は、使い易いようにアレンジしていいんだっただな？」

「はい、そうですよ。何か良い工夫がありそうですか？」

一応、大多数の人に使い勝手のいい定型ってのはある。神殿とか魔法学校とか、軍隊の練兵所で教科書に採用されてるようなやつ。

でも、要は魔力の作用の仕方、作用する場所とか強さとかをはっきりイメージする助けになるなら、どんなのでもいいんだって。

例えば、熟練した魔道士なら飛竜族みたいに、呪文無しで、イメージするだけで魔法を発動させたり出来るらしい。

補助動作だって人それぞれ。杖を振ったり、指で印を組んだり。

中には、歌ったり踊ったりする奴もいるとか。……何じゃそりゃ？

「チビスケ。お前さん、弓が得意なんだろう。矢を射るつもりでやってみたらどうだ？」

オレは、ポンと手を打った。

「あ！それ、いいかも」

そうそう、それだよ！さっきから、”力を溜めて、狙って、撃つ”っていうこの手順、何かに似てるなーって思ってたんだ。弓矢で的を射るのと一緒にじゃないか！

……よし。いけそうな気がしてきたぞ！

オレは左手を前に伸ばして半身に構え、弓の弦を引き絞るつもりで、すいと右手を後ろに引いた。

うん。今までよりずっと強く、左手に魔力が集中するのがわかる。

呪文も変えないといけないな。

「天の雷、渦巻く風よ、矢となりて万物を貫け！」

心に浮かんだ言葉を唱え、見えない矢を放つように、右手を開く。

「”雷皇旋”ッ！」

シュンッ！！

わお！”見えない”はさすが、細い稲妻みたいな光の矢が、風をまとい付かせて一直線に飛んでくのが見えた。

パリパリパリッ。

的に当たる寸前で、光の矢は枝分かれして拡散してしまった。でも、的に使っていたラピスの上着は、吹き流しみたいに、今までになく大きくはためいた。

「うーん、惜しいっ！もう一押しなんだけどなあ……」

オレが首を捻ると、アンバーは一人でふむふむと頷いて、的に近

付いた。

”的”は、十字に組んだ木の枝に、案山子よろしくラピスの上着を羽織らせた物だ。

アンバーはラピスの上着を外し、縛り合わせた木の枝の交差点をトンと手の甲で叩く。

「よし、もう一回。これで最後だ。ここのだ真ん中を狙って撃て。それで、今度こそ上手くいく」

んん？ヒトのことなのに、やけに自信たっぷりと言い切ってくれるなあ。なーんか腑に落ちないんですけど……、兎に角、やってみるか。

オレは額の汗を拭うと、緑のバンダナをキュツと締め直し、もう一度呪文を唱えて……、

”雷皇旋”！！」

シュオンッ！！

撃った瞬間、さっきよりずっと手応えが良いのがわかった。

輝く光の矢が、もっと速く、もっと力強く、空気を切り裂いて飛ぶ。

パシーンッ。

小気味良い音を立てて、縦棒が折れた。命中点がほんの少しだけ結び目より上にずれたのは、本物の矢と違って、重力で落ちることがないからだろう。その程度は、これから微修正していけばいい。

「やったあ！大成功ーっ！！」

オレはぴょんぴょん飛び跳ねてラピスの所に行き、パンと手と手を打ち合わせた。

「やった、やったー！」

「やりましたねー。エメルダさん、筋が良いですよ」

オレはアンバーにも両手を挙げて近寄ったけど、アンバーは腕組みして、なにげに拒否。

「何だよ、ノリが悪いな。もっと、仲間の成長を共に喜び^{ことほ}ぐ気にならないか？」

「愛想なぞ期待しないと言ったのは誰だ」

しょーがなく、オレはアンバールの両肩を勝手にポンと叩いた。

「っと……。それで、今のはどーゆうカラクリだよ？何で、棒だけにしたら上手くいったんだ？」

「ああ……。魔法は意識の集中が肝心だと聞いたからな。的が大きいと、狙いが絞り切れんのじゃないかと思ってな」
ふむ、成る程。

上着をかけてあったのは、少しでも風が動いてどこかに当たれば、目に見えてわかりやすいだろう……。ってことだったんだよな。ラピスの上着はどうせ、木の皮とか草の葉っぱを魔法で変化させただけのものだから、破けてもいくらでも替えは利くんだけど。

”少しでも” ってのが逆に、” 少ししか” 動かない原因になってたってことか。

「それに……。 」

アンバールはしばし言いさして、ちらりとラピスの顔を見た。

「お前さん、人を殺したことがないだろう」

「……。あるよ」

「” その一回 ” は除いて、だ」

「……………ない」

「そうだろうと思った」

アンバールは前髪を掻き上げ、指で梳る。

” 人 ” をイメージさせるのだと、無意識のうちに避けようとする。心の動きが、如実に魔法の効果に表れるんだ」

「……………!!」

有頂天になっていた気分が、急にぺしゃんとしぼんだ。

ラピスが謝る。

「すみません。配慮が足りませんでした。同族に害意を向けられないのは、当然です」

オレは口を尖らせた。

「……………悪かったな」

「悪く”はあるまい”

アンバールが苦笑する。

「どの道、俺達はこの時代で人を殺すのは避けるべきだ。三百年ともなると、どこでどう血がつながっているかわからん。先祖はバルトー公子とシトリン姫だけじゃないんだ」

大きな手をオレの頭に載つけて、わしゃわしゃと金髪を掻き回す。
「まずは”物”で練習を積んで、コントロールを正確にすることだな。殺さずとも、手や足を狙って戦闘不能に出来れば、充分役に立つ。要は使い方次第だ」

……。アンバールのこの手は、人を殺してきてるんだよな。

それも多分、いっぱい。

だけど、”怖い”感じはしないなあ。

オレは裏稼業で生きてきたから、人を”善悪”では判断出来ない。良いか悪いかって言い出したら、アンバールもオレも”悪い人間”に決まってる。^{アウトロー}無法者なんだもん。

カタギさんにとって善悪は、相手を信用出来るかどうかの大事な基準になるだろう。

善良な人間同士なら、素のまんまの”好き嫌い”による関係にプラスの補正が加わる。見ず知らずの他人とか、『ちよつと気に入らないな』とかいう奴相手でも、露骨に冷たくしたりしないで、礼儀を守って親切にしようとする。

でも、オレ達みたいな”悪党”には、この補正はマイナスに働く。善良な人間は、善良であるが故に、悪党にはかえって情け容赦なかったりするんだよね……。

かといって、単純に価値観が反転して、悪党同士なら仲良くするかっていうと、そうでもない。仲間意識が成立する場合もあるけど、どっちかっていや、騙したり喧嘩したりが、善人同士よりもはるかに平然と起きる。

ま、総合的に言って、オレ達”悪党”には、信用出来る味方が少

ない。

だから……んー、なんてゆーか、嗅覚が発達するんだよ。

目の前の人間が協力的か敵対的か——どこまで近付いていいもんなんだか、個別に見極めなくちゃならない。

例えば、親父の盗賊団の連中とかはさ。嘘ついて人を騙したり、殺したり盗んだりもするけど、仲間内では陽気で気のいいヤツらだった。

そりゃ、ウチんとは”義賊”で、女子供とかお年寄りには手出ししないって縛りがあったから。それが守れるのは、そんなに極悪なヤツじゃないわな。

ウチの隠れ家によく出入りしてた、呑兵衛の隠者様なんかも。蔵の葡萄酒を盗み飲みするのがやめられなくて、とうとう神殿を追放されたとかいう不良神官だけどさ。

”お天道様は照らす人間を分け隔てしない”とか言って、星曜日になるとお祈りしに来てくれて——その後で振る舞われる上等の葡萄酒が目当てだった気もするけど——オレは結構、そんな隠者様に救われてた気がするな。

あの呑兵衛の隠者様に出会わなかったら、オレ、神様も神官も全然信じなかったと思う。

母ちゃんが生きてた頃のオレンちは、神殿領にあった。領主があんな奴じゃなかったら、父ちゃんは盗賊になんてならなくて、オレだって、今でも牛さん羊さん達に囲まれてカタギの暮らしをしたたかもしれない。

あんな奴ばっかりが神官だと思ってたら……、あー、ちくしょう。思い出したくもない。

……。えっと、何だっけ。そうそう。

そーゆう、盗賊団の仲間とか呑兵衛の隠者様みたいに、”悪い”人だけで安心出来る人間もいる。だけど、その逆もあるよ。

んー……、例えばさ。

”石打ちの刑”ってのがある。街の城門とか橋のたもととか、人

通りの多い所に罪人を吊したり柱にくくりつけたりして、通る人に一つずつ石を投げさせて打ち殺すんだよ。

ある時オレは、どうしてもその日のうちに街に入る用事があって、”石打ち”の現場を通りがかった。

立て札によると、神殿の祭壇から銀の燭台を盗もうとした不届き者だっというんだけど……。

そいつは、ガリガリに痩せた、見るからに路上暮らしのみなしごだっけわかる、オレよりも一つ二つ年下ぐらいの子供だった。しかも、離れた所でしくしく泣きながら見守ってる、もっと小さい子供達がいて、そいつらの兄貴分なんだなって見当がついた。

空腹に耐えかねて――それも、自分一人じゃなくて、仲間のために盗みに入っただってぐらい、誰だっけわかりそうなもんだろ。

神殿って、こういう子供達を保護して、養い親を探したりとか、まっとうな仕事に就けるように勉強を教えてやったりとかするのが仕事じゃなかったっけ？せめて、パンの一切れも分けてやろうとか思わなかったの？

痛そうだなって感じで、申し訳なさそうに石を投げてく奴もいる。でも、ふてえ野郎だとか人のクズだとか罵って、憎々しげに、思い切り石を投げてく奴もいる。

それは、きっと家族や近所さんや、仕事のお客さんには優しいんだろうなってオッチャンだったり。お勉強もしっかりしてお行儀もいい”よく出来たお坊ちゃん”なんだろうってにーちゃんだったりするんだけど……。

オレには、見ててすっごく怖かった。

石を渡されたオレが固まってる、後ろから、機械で撃ち出したのかって勢いでビュンツと大きな石が一つ飛んできて、”罪人”の眉間をがち割ってとどめを刺した。

振り返ったら、人混みの中に、アンバールの後ろ姿がちらっと見えた。

いや、マントのフードをすっぽり被ってたから、顔は全然見てな

いんだけど。あの背の高さと大剣、それにあの腕前は、矢っ張りアンバールだったよな？

そう……、『殺さない』のと『殺せない』のは大違いだ。

あの場合、なまじ手心を加えたって、苦しみを長引かせるだけだし。

人を殺せないなんて、アウトロー無法者としちゃ致命的な落ちこぼれだよ。

でも、アンバールはオレのこと責めないんだ？

すっげー意外だなあ……。

「そういうわけだ、ラピス。こいつは、実戦でも人相手に攻撃魔法は使えないものと思っておいた方がいい。魔獣や、物が目的の時は役に立つだろうが」

「わかりました。勿論ですよ。無理のない範囲で協力していただけるだけで、充分助かります」

あれれ？　そういや。

ラピスは、一刻も早く弟くんの所に行きたいんじゃないのかな？　こんな風に、オレに魔法を教えたり、魔獣退治したりしながら、のんびり旅をされていていいのか？

……と、尋ねてみたら。

「お話していませんでしたか？　弟は今、角の生え替わりの時期なんです。まだ一ヶ月以上は猶予があるはずですよ」

新しい角が伸びるまでは、魔力の調節が上手く出来なくて、体調も不安定になる。その間は、軍用竜に改造されることもないだろうって話だ。

タイガーアイ砦までは、ゆっくり歩いても、もう一週間や十日ぐらいの道程だ。急ぐ必要はないから、それよりも、戦力増強しておこうってわけだね。

「僕自身、色々と練習している所です。こんなに長い間、人の姿でいるのは初めてですからね」

今までは、人族のお偉いさんとの会議に臨む時とか、魔道士に技

術指導したりする時に、話し合いやすいように変身するぐらいだったそうだ。

「この体で出来ることを、しっかり把握しておかないと……。王都では、焦って無理をしすぎてしまいました。今度は、慎重に準備してから行きます」

「アレは危なかったよな。オレ達に会わなかったら、どうするつもりだったんだ？」

「そうそう簡単に捕まりはしなかったと思いますが……」

一か八か、残り少ない魔力でも変身出来る小鳥か犬猫にでもなつて追っ手を撒き、神殿に逃げ込むつもりだったらしい。

人間以外のものに変身すると、魔法が使えなくなってしまう。猛禽類とか野良犬とか、人間に獲って食われる恐れもあった。それに、変身し直せば余計に消耗するから、途中で力尽きて街中で飛竜に戻ってしまい、大騒ぎになったかもしれない。

”聖域法”って言って、神殿の敷地内は、俗世の権力武力には不可侵ってことになってる。飛竜の姿に戻っても、何とか神殿に辿り着きさえすれば、神官達は敬意を払って匿ってくれただろうけど――、『ここにいます』ってことがギヤマニア軍にバレれば、厳重に監視されて、事実上軟禁状態になってしまったろう。ラピス自身が捕まることはなくても、弟を助けに行くのは難しくなっていたはずだ。

「エメルダさんから強い魔力を感じたので、まさか、本物の神官ではないとは思いませんでした。予想外にご迷惑をお掛けすることになってしまいましたね」

『助けて』っていうのは、『神殿まで連れて行ってほしい』って意味だったんだね。

本物の神官だったら、亡命者とかを匿ったって、世俗の法で罰せられる心配は無い。

でも、オレ達自身が王城の兵士達にしょっぱかれてもおかしくない事情を抱えていたから、一緒に王都を出ることになっちゃった。

「別に。迷惑だとは思ってないよ。結果的に、オレ達の方も目的

に近付けたみたいだし。それよか……、」

一つ、不思議に思ってたんだ。

「ラピス。どうせ変身するんだったら、人相変えちゃったら？」
道中、何回か変身し直してるんだけど。その度に、ホクロの位置とか爪の形とか、細かい所までそっくり同じなんだ。この姿で、きつと指名手配されてるだろうに。」

「それが……、変えられないんです」

何に変身しても、元々の性質は反映されるものらしい。性別とか、若いかな年取ってるかとか、体が大きいか小さいかとか。

ただ、他の生き物に変身した時は、隅々までしっかりイメージしたつもりでも、毎回どこかしら微妙に違うのが普通だそうだ。

「そう……何故か、人に変身する時だけは、寸分変わらず同じ姿になりますね……」

ラピスは何か考え込んでる様子だったけど、やがて、思い詰めた感じで尋ねてきた。

「あの……。何を聞いても、未来を変えようとするつもりはありませんから、教えて下さい。魔法が失われた世界で、飛竜族はどうなったのですか？」

「ああ……、飛竜族は……」

人間になったんだ。

魔法は使えなくなっても、人になった元飛竜——竜人族には、豊富な知恵と知識があった。各国の王侯貴族の政治顧問になったり、神殿や学問所の先生になったりしたらしい。

まあ、みんながみんな社交的というか、ヒト族に友好的だったわけじゃなく。山中でひっそりと隠遁生活を送って、一生を終えた人も多かったようだ。

初代の竜人族は、飛竜だった頃からのまま、三百年の寿命も保った。その後は世代を重ねるにつれ、ヒト族との混血が進んだりして、寿命が短くなってきている。

とはいえ、オレ達の生まれた三百年後の時代でも、百歳以上の長老はさらにいるし、純血の竜人族なら百五十歳ぐらいまでは生きる。今でも、飛竜だったことがある初代の、最後の生き残りだっていう大長老のじーちゃんが、ユークレイス山脈の山奥に住んでるそうだ。

「確か……ラズリとかいったっけなー」

「……!!」

ラピスは、すっごく驚いた顔をした。

「まだ、弟の名前を言っていないませんでしたか」

「あー、そういえば……」

名前を知らなくても、気にしてなかったな。

カタギさんなら、初対面の挨拶にまず名乗るのが礼儀だろう。

でも、オレ達みたいな裏稼業の人間の場合は逆。名前はとっても重要な情報であるだけに、不用意に教えたり尋ねたりしないものだ。オレとアンバールが、初めて会った時に名乗り合っちゃまったことの方が、無法者同士としちゃ椿事といっているだろう。

……うん？そう考えると、アンバールがオレを名前で呼ばないのは”常識的”な対応で、チビって呼び方に過剰反応するオレの方がガキなのか？でもでも、ラピスのことは普通に名前で呼んでるくせに……。

……っと。考えが脇に逸れた。

「ラズリというんです」

「え！それじゃあ……」

「間違いないでしょう。ラズリは僕達の里で最年少です。……多分、飛竜族全体の中でも」

飛竜族は個体数が少ない上に、生まれ育つ過程で大量の魔力を必要とするため、そもそも子供が生まれにくいそうさ。

それでも、毎年十頭や二十頭は新たに赤ちゃんが誕生していたんだけど。五十年ぐらい前から急激に出生数が減って、ラズリの後には十七年間、もう一頭も子供が生まれていないんだって。

魔法の使いすぎによる、世界規模での”気”の乱れに、飛竜族は敏感に影響を受けていたんだ。

「ギヤマニアの飛竜狩りが始まる前から、僕達はゆっくりと衰亡の道を辿り始めていました。この状況にどう対処するか、里では意見が三つに分かれていて……」

要するに、魔法技術の使用を誰が管理するか？って話だ。

一番多数派なのは、魔法を濫用しているギヤマニア王国を、他の主要四ヶ国と飛竜族で制裁しようというもの。

いやいや、他のヒト族の国々だって自主規制や相互監視に任せておくのは手ぬるい、飛竜族が一元管理するべきだ……というのが第二の意見。

そして……、

「実は……ダイヤモンド・スピリットを全て集めて、一切の魔法を封じるべきだというのは、長の姫のガーネット様と僕で考えた案なのです」

飛竜族だって、人間達を正しく指導出来るほど、本当に”賢い”のか？

悪足掻きしたって、滅びの時をほんの少し先延ばしにする程度じゃないのか。それよりは、ヒト族や他の生き物達まで共倒れになる前に、誰にも管理しきれない力は一斉に放棄してしまえ、ってわけだ。

「まだまだ、賛同してくれる仲間ごく少数ですけど。」

一番過激に見えますからね……。でも、一番確実に公平な方法だと思えます。いいえ、比較してどうこうというより、もはや他に選択肢は無いでしょう。

こうして里の外を出歩いて、現状を見て回ると、その思いを強くします」

今オレ達のいる草原だって、あちこちに、巨大な虫喰い穴みtainな裸地が出来ている。魔草が周りの養分を吸い尽くしたり、魔獣化した虫や草食動物が食い荒らしたりした跡だ。

魔獣の害に限らず、無計画な焼き畑とか木材の伐採でも起きることだけど。一遍、動植物がごっそり死に絶えて荒れ地になってしまった土地は、もう元の状態には戻らない。肥えた表土が雨風に流されてしまうと、元と同じ種類でないまでも草木が生えることすら、難しくなる。フリント沙漠の二の舞だ。

「人や動物が全く住めなくなるのは、まだ五十年や百年先かもしれません。ですが、元の状態に回復出来る限界を超えるまでは、もう十年二十年というところでしょう。」

差し迫った問題なのに、飛竜の里でも冷静な議論がなされているとは言えません。後継争いが絡んで、それぞれ派閥に分かれて依怙地になっているんです」

「後継争いって……、姫様は一人っ子なんだろう？」

とオレが尋ねたら、アンバールが口を挟んだ。

「誰が婿になるかという話だろう」

「ええ……そうです」

何だかそわそわするラピス。おや？

「もしかして、ラピスも候補の一人？」

「はい、まあ……一応」

一応、って……。押しが弱いな、このにーちゃんは。

ふむふむ、そーでしたか。支持率は低いけど、個人的には姫様と気が合ってるんだね。

そいつは前途多難、波瀾万丈だ。頑張れよー。

「僕には、無益に争う気はありませんよ。魔法技術の管理の問題とは別に、姫様と里のみんなにとって一番良いように、誰に決まっても協力を惜しまないつもりでいます。」

でも……最終的に、僕達の案が通ったということですか……」

浮かない顔のラピス。喜んでもよさそうなものだけど？

「それで？ 変身する時に人相が変えられないことと、飛竜族の未来と、どういう関係があるんだよ？」

「ああ、ええ……これはまだ、仮説に過ぎないのですが。もし僕の

推測が正しければ……、里のみんなを説得出来る可能性が高くなり
そうなんです……」

「どーゆうこと？」

「……もつと、はっきりしたことがわかったら、あなた方にもお
話します」

あれれ。勿体付けるねえ。

「すみません。事が事だけに……。この考えが当たっていれば、七
つ目のダイアモンド・スピリットの行方もおおよそわかります。も
しかすると僕達飛竜族は、ギヤマニア王国以上の脅威と見なされて、
あなた方とも敵味方に分かれてしまうかもしれません」

「……??」

そんな、ますます気になることを……。

「すみません。安心して下さい……と言うのもずるいかかもしれま
せんが、少なくとも僕は、あなた方やバルトー公子の味方のつもり
ですよ」

もう一度謝ると、ラピスはこの話題を打ち切った。

「ところで、アンバーさん。手合わせしていただけませんか？
人相手の戦闘にも慣れておきたいのです」

「ああ。俺も、魔法が使える奴相手に練習しておきたいと思ってい
たところだ」

と、アンバーは背負っていた大剣を抜いた。

オレは木陰に座って、一休み。

ふー、水筒の水が冷たくて美味しい！水の魔法も使えるラピスの
おかげで、ほとんど何処にいても、きれいな地下水が手に入るんだ
よね。便利、便利。

「遠慮無くどうぞ」

「そっちこそ、手加減は無用だ」

言うなり、まずアンバーが仕掛けた。

ブンッ！

大剣の横薙ぎを、ラピスは身軽に後ろに跳んでかわす。

あれっ!？今、ほんのちよつとの動きで随分大きく跳んだような気が……？

アンバーは追い掛けて、お次は大剣を真上から振り下ろす。ラピスは、手刀で剣の腹を払おうとする。

ええっ？そりゃ無茶だろ!……と思ったら、手が触れるか触れないうちに、剣の軌道がぐんっと大きく逸れた。

あ、わかった!!風の魔法で、手足の動作を補強してるんだ!

今度はラピスが前に出る。右手の二本指でスツと空を切ると……、シュッ!

三日月状の風の刃が飛んだ。アンバーの肩先をかすめて、背後の草むらを刈り払う。

うっひゃー!至近距離で、しかも初めて見る技なのに、アンバーの奴よくかわしたな。

アンバーとラピスは、間合いを取り直し、ニツと笑い合った。

”手加減無用”といっても、一応お互いに小手調べしてみたわけか。

そこから、本格的な攻防が始まった。

ひょえー……!!ラピスってば、ひよろつと細っこいから、格闘が得意そうには見えなかったけど。どうしてどうして、接近戦でも強いじゃないか!

アンバーもアンバーだ。ラピスがいろんな種類の魔法を矢継ぎ早に使ってくるのに、ことごとく、かわすか、先制攻撃をかけて出鼻を挫いている。

うーん。折角、オレも使える技を覚えたと思ったのに。こいつらはその遙か上に行く、反則級なレベルの高さだ。

仲間が強いのは頼もしいことなんだけど……。何だろ、この取り残され感。

くっそー、オレだって大人になれば……、

……。大人になっても、ここまで遅しくはなれないんだよな、この体じゃ。

どーしようもないのは、わかってる。でも、こんな風にまざまざと力の差を見せつけられちゃうと、やっぱり悔しいなあ……。

ま、出来る範囲で何とかするしかないんだけどね。

慰めを求めて、つついっい驢馬くんの首をナデナデしてしまうオレ。

あ、嫌がられた。お食事の邪魔してゴメンねー。

せいぜい今後の参考にと、二人の仕合を見学していると――。

……あれ？ほらほら、まただよ。

アンバールの奴、思いつ切り剣をぶん回してるうちに、だんだん楽しそうな顔になってくる。普段が不機嫌そうで表情に乏しいだけに、薄気味悪いったら。

人殺しが出来ないオレのこと馬鹿にしないから、こいつも厭戦的なのかと思いきや。矛盾してねえ？

よくわかんない奴！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3403n/>

DIAMOND SPIRITS

2011年10月14日15時59分発行